

# 大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画

平成 26 年 3 月

大 宜 味 村



## はじめに

本村は、沖縄県本島北西部に位置し県都那覇から約87km、北部の拠点都市である名護市からは、約22kmの距離にあり、総面積は63.45km<sup>2</sup>で県内第9番目の広さをもつ中山間地域です。人口は約3,300人の小さな村ですが、「健康長寿のいきいき輝く文化の村」をテーマに掲げ、老若男女がユイマール精神のもと、産業は農業を中心としながら、昨今、観光振興に力を注ぎ、エコツーリズムを中心とした地域づくりに取り組んでおります。

本村の自然は約76%が山岳地帯の山林に囲まれ、隣接する国頭村、東村とともにやんばる地域一体の豊かな自然環境を形成し、天然記念物に指定されているノグチゲラやオキナワトゲネズミなど、動植物の貴重な固有種が数多く生息する亜熱帯の豊かな森が広がる地域です。本村における昭和中期までの石灰岩の山々は、用材や薪炭の供給地として地域の財政を賄う場所の一つでした。我々の祖先は、生活の糧を自然の中に見出し共生してまいりました。その後、高度成長期を経て人々の生活様式は変化し、石灰岩の山々には自然が豊かに蘇り、今日、多くの貴重な野生生物が生存しております。

大宜味村は、第4次総合計画における三大重点プロジェクトの一つとして「大宜味型体験滞在・交流プログラムの構築」を柱として掲げております。また、平成21年度に「大宜味村観光振興基本計画」を策定し、環境保全型観光を基本方針に据え、持続可能な観光づくりを実現させる実動的な人材の育成に取り組むことを掲げており、さらには、平成25年12月には「奄美・琉球世界自然遺産候補地科学委員会」において、本村を含む沖縄島北部（やんばる）が世界遺産暫定リストに記載され、日本国の推薦を受けることが決定されております。それらに伴い、本村を含むやんばる地域においては、早急に環境保全型観光の体制づくりにむけて取り組む必要性が生じております。

そのため、大宜味村の自然環境を保全・活用するとともに、村内における伝統文化の継承・発信する環境保全型のエコツーリズムガイド育成体制の構築を目指すため、「大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画」をこのたび策定いたしました。

この計画を策定するにあたり、多くの貴重なご意見を賜りました委員の皆様のご尽力に対し、深く心から感謝を申し上げます。

結びに、本計画において“世界に誇れるエコツーリズムガイド”が誕生することを期待するとともに、いつまでも豊かな自然が後世に育まれることを祈り、あいさつに代えさせていただきます。

平成26年3月

大宜味村長 島袋義久



# 目 次

## 第1章 業務概要

1. 業務目的	1
2. 業務期間	1
3. 業務項目・業務の流れ	2
4. 業務内容	2
5. 黄金人検討委員会	4

## 第2章 大宜味村エコツーリズム基本計画

1. 大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画策定事業の目的	5
2. 大宜味村エコツーリズムの現状と課題	6
3. 大宜味村エコツーリズム人材育成の基本理念	7
4. 大宜味村エコツーリズム人材育成の基本方針と推進主体の必要性	8
5. 大宜味村の目指すべき具体的エコツーリズム像と方向性	10
6. 目指すべきエコツーリズム像にむけた推進体制「黄金人プロジェクト」	14
7. ガイドリーダーの育成と拠点の役割	15
8. モデル拠点地域としての屋古集落の特徴	18
9. モデル地域におけるワークショップ型講演会の結果	21
10. 地域課題の整理と今後のモデル地域での活動	25
11. 大宜味村エコツーリズム人材育成の推進体制	33
12. 今後の展開	36

## 第3章 現地視察・先進地視察・ワークショップ型講演会報告書

3-1 喜如嘉小学校 全校野鳥観察視察会報告書	37
3-2 先進地視察報告書	43
3-3 ワorkshop型講演会報告書	61

## 第4章 黄金人検討委員会記録

第1回検討委員会記録	93
第2回検討委員会記録	95
第3回検討委員会記録	97



# 第1章 業務概要



## 1. 業務目的

大宜味村は豊かな自然に恵まれ、人々の生活によって形成された歴史と文化に彩られた「長寿の里」として、県内外はもとより世界にも知られる地域である。

これら「大宜味村の宝」である独特の文化・歴史・暮らし・そして自然環境を活かす方法として、大宜味村はエコツーリズムを振興し、地域の活性化を図ることとしている。

この考え方から、平成 21 年度に「大宜味村観光基本計画」を策定しており、自然環境と生物多様性の保全に配慮しつつ、適切な観光利用を促進するために「エコツーリズム推進法」に基づいた「大宜味村観光振興推進規制条例（仮称）」制定に向け、準備を進めている。

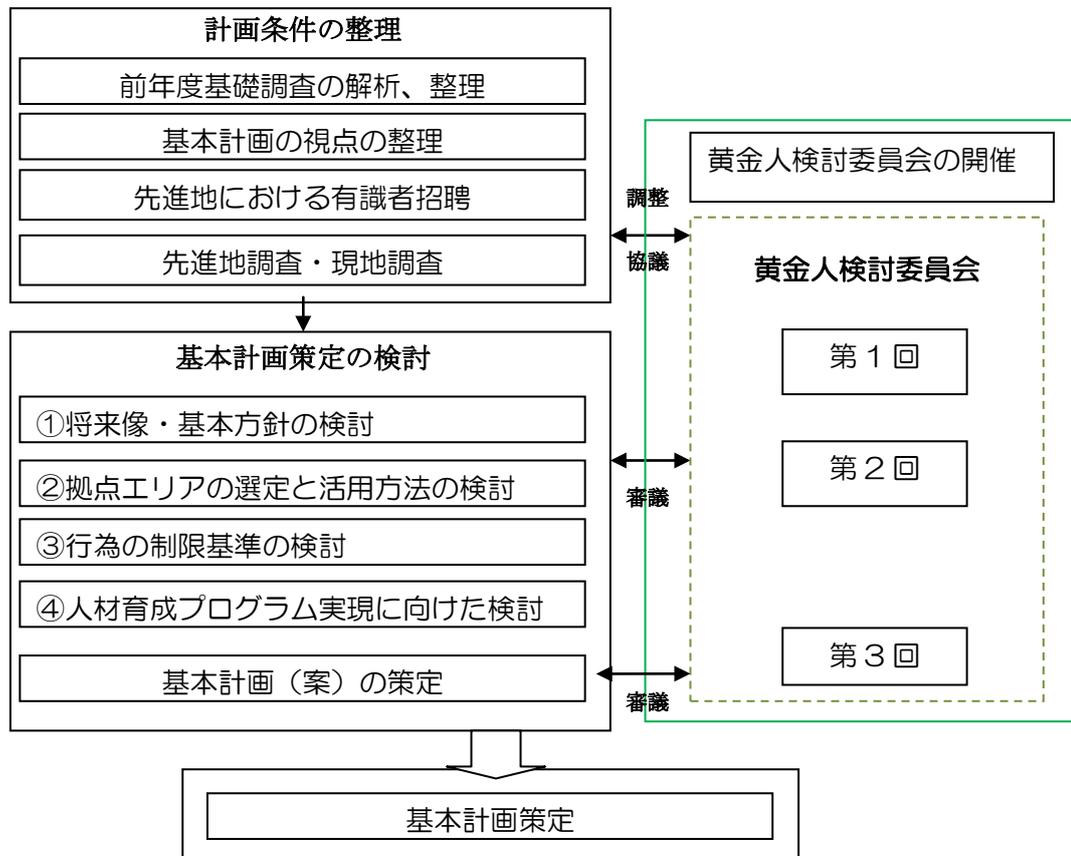
しかし、現状としては、国の重要無形文化財として指定されている田港御嶽に代表される「御嶽」や「芭蕉布」など村民に大切に守られ育まれてきた自然資源・文化遺産がある一方で、「玉辻山」や「ター滝」の問題に見られるように、過剰利用により環境が荒廃している状況もある。本村の資源である「自然・文化・暮らし」を、村の活性化に結びつける有効な保全方法を見つけることが出来ていない状態である。

このことから、地域資源を活用し、地域全体の活性化を行うことができる「大宜味村エコツーリズム」の方向性を明らかにするとともに、大宜味村エコツーリズムを推進する実働的な人材を育成するために必要な仕組みを構築する目的で、大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画策定業務を実施するものである。

## 2. 業務期間

平成 25 年 9 月 24 日～平成 26 年 3 月 14 日

### 3. 業務項目・業務の流れ



### 4. 業務の内容

#### 1) 基本計画策定の検討

平成24年度の基本方針及び検討案をもとに、黄金人検討委員会を開催し、以下の計画策定の検討を進めた。

##### (1) 将来像・基本方針の検討

大宜味村における将来的なエコツーリズムの在り方と推進体制について検討を行った。平成24年度大宜味村エコツーリズム調査報告書関係資料、及び基礎資料等の整理と解析を行い、村のエコツーリズムの方向性を定めた。

##### ①先進地視察

大宜味村エコツーリズムの方向性とガイド育成および運営方針の参考とするために、エコツーリズム先進地調査（東京湾野鳥公園・谷津干潟・NPO 法人ピッキオ）を実施し、報告書を作成した。

## ②現地視察

地域住民の地域資源への理解を促す方法の参考とするために、喜如嘉小学校野鳥観察会を視察し、報告書を作成した。

## (2) 拠点エリアの選定と活用方法の検討

村内におけるエコツーリズムの拠点候補地を現地踏査し、対象となるエコツーリズムの拠点エリアを選定し、ツーリズム資源としての具体的な活用を検討した。

### ①現地視察

現在最も注目されているエコツーリズム拠点エリアとして、ター滝、六田原散策道～ネクマチヂを中心に、村内のエコツーリズム拠点候補地を視察した。

### ②ワークショップ型講演会の開催

エコツーリズム先進地より講師を招聘し、講演会と村の現地視察会を開催した。大宜味村が取り組んでいく大宜味村エコツーリズム人材育成計画の実現に向けて、エコツーリズム先進地の方々から学び、交流する場としてワークショップ型講演会をエコツーリズム拠点エリアで開催し報告書を作成した。

## (3) 行為の制限基準の検討

エコツーリズム拠点エリアにおける良好な環境を保全するために必要な行為の制限基準の求め方について検討を行なった。

## (4) 人材育成プログラム実現に向けた検討

人材育成プログラムを実施するために、具体的なプロセスを検討した。先進地における事例や実際のプログラム、運営方法を検討し、大宜味のエコツーリズム人材育成の方法を定めた。

## 2) 年次の成果について

前年度までの調査結果と先進地調査、現地視察、先進地講師招聘などの活動と黄金人検討委員会での内容を加え、大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画を作成し報告書にまとめた。

## 5. 黄金人検討委員会

本計画を進めるにあたって、大宜味村におけるエコツーリズムの在り方や、拠点エリアの選定と活用方法等、エコツーリズム人材育成基本計画策定にむけた作業課題について有益な助言、指導を得るために、有識者と地域住民からなる検討委員会「黄金人検討委員会」を組織した。

### 黄金人検討委員会名簿

#### ■検討委員

区分	氏名	所属等
座長	宮城 邦治	沖縄国際大学 教授
副座長	新城 和治	元琉球大学 教授
委員	山城 春江	大宜味村喜如嘉小学校 教諭
委員	山川 均	木工房
委員	稲福 智裕	JAL プライベートリゾートオクマ

#### ■大宜味村

1	山城 均	大宜味村役場企画観光課 課長
2	藤田 元也	大宜味村役場企画観光課 係長

#### ■事務局（コンサルタント）

1	宮城 良治	NPO 法人やんばる舎 理事長
2	増田 耕平	NPO 法人やんばる舎 常勤理事

第2章  
大宜味村エコツーリズム人材育成  
基本計画



## 1.大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画策定事業の目的

大宜味村は、第4次総合計画における三大重点プロジェクトの一つとして「大宜味村型体験滞在・交流プログラムの構築」をエコツーリズムの柱として設定している。また、平成21年度には「大宜味村観光振興基本計画」を策定し、環境保全型観光を基本方針に据え、持続可能な観光地づくりのために実動的な人材の育成に取り組むことを掲げている。平成25年1月に「琉球・奄美」が世界自然遺産暫定一覧表に記載されたことにより、希少種が多く生息する本村を含むやんばる地域において、環境保全型観光の体制づくりに向けて早急に取り組む必要が生じている。

そのため、本村は世界自然遺産登録が検討されるやんばるの自然を保全・活用するとともに、村内の伝統文化を継承、発信する環境保全型のエコツーリズムガイド育成体制の構築を目指すこととし、大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画を策定して、エコツーリズムにおける人材育成を図るものとする。



写真1：平南川（ター滝）



写真2：やんばるの森



写真3：喜如嘉集落

## 2.大宜味村エコツーリズムの現状と課題

### 1) 世界から注目される自然環境をもつ大宜味村

2013年1月に政府は、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づく国の世界自然遺産暫定一覧表に、「奄美・琉球」を自然遺産として記載することを決定し、本登録に向けた作業を開始した。

### 2) 大宜味村の社会状況

純生産が高い産業は建築業、農業であり、観光に関するサービス業は低い水準で推移している。現在の産業構造では、村全体の経済振興を図ることは難しく、産業の多角化が求められている。若者の就職先が少なく、地域を離れてしまうケースが多い。

### 3) 大宜味村のツーリズムの体制

現状では、多くの雇用を生み出す程の集客力を持ったエコツアープログラムの形成には至っていない。

さらには、行政と事業者等を繋ぎ地域を活性化する推進主体であるコーディネーターが少ない現状である。

### 4) 大宜味村の観光資源の状況

沖縄県の「平成21年度持続可能な観光地づくり支援事業報告書」によると、沖縄県内の潜在的観光魅力のAランク(※)の資源は、大宜味村には存在しない。

(※資源の誘客力のランク。対象は県内外におよぶ。)

近隣では、国頭村の比地大滝一帯、辺戸岬一帯。東村の慶佐次湾のヒルギ林などがAランクとされている。

村内で、Bランクに位置づけられ、観光地として注目されつつあるのはター滝、六田原～ネクマチヂ散策道、七滝であり、それらの地域では、一般利用者や村外の観光事業者により利用が急増しつつある。一方利用過剰により、車両駐車、ゴミ、排泄物等の問題が生じている。

さらに、観光客は自然資源のみを利用して長期滞在をしないため、地域の利益に繋がっていない。

### 5) 大宜味村における観光施設の状況

宿泊施設が少なく、民泊を除くと観光客が滞在しにくい状況にある。

ター滝、ネクマチヂ～六田山散策道等、利用が多い個所でも案内板などの情報発信が少ないため、利用者には不便といえる。また配布できる資料・パンフレットなどの整備もこれからの課題である。

### 3.大宜味村エコツーリズム人材育成の基本理念

「平成 24 年度大宜味村エコツーリズム人材育成基礎調査（方針）業務報告書」では、大宜味村エコツーリズム人材育成の基本理念として以下の項目が挙げられている。

- 観光客に「自然、伝統食、歴史、文化」と「健康、長寿、保養」を提供
  - 「結いまーる」でサービスとして癒しを提供
  - 環境保全型の観光振興を目指す
  - 行政と事業者等を繋ぎ地域を活性化するコーディネーターの育成
  - エコツーリズムを中心とした若者に魅力的な産業の創出
  - 北部地域（名護市・本部町・今帰仁村を含む）での広域ネットワークづくり
- ※平成 24 年度大宜味村エコツーリズム人材育成基礎調査（方針）業務報告書より抜粋

村内には産業が少なく、村の基礎基盤を支えるべき若者達が村外へ流出してしまっている。今後の村の発展を考える上で、大宜味村に「働く場」をつくり出すことが重要な課題となっている。

今後、課題を解決するための取り組みの一つとして、地域資源を活用するエコツーリズムを魅力的な産業にしていくことが重要であると思われる。このことから上記項目を整理し、以下のように大宜味村エコツーリズム人材育成基本理念を設定する。

エコツーリズムを通じて先祖から受け継いできた地域資源を活用して、人々が憩い、働き、学ぶことが出来る「暮らしの場」を、村内に創造する。

そのことが村の掲げる「大宜味村観光基本計画」の基本方針である体験滞在・交流プログラムの実現を図ることになると期待される。

#### （基本理念）

エコツーリズムを通じて先祖から受け継いできた地域資源を活用して、人々が憩い、働き、学ぶことが出来る「暮らしの場」を、村内に創造する。

## 4.大宜味村エコツーリズム人材育成の基本方針と推進主体の必要性

### 1) エコツーリズム人材育成の基本方針について

「平成 24 年度大宜味村エコツーリズム人材育成基礎調査（方針）業務報告書」から、今後求められていることとして以下の項目が挙げられている。

- (1) 北部地域での広域連携によるネットワークづくり
- (2) ガイド認定制度の検討
- (3) エコツーリズム・地域活性化連絡会の設立と運営及び、情報の共有
- (4) 目指すべきエコツーリズム像の検討
- (5) 勉強会・研修・現地視察会の開催
- (6) 行政支援によりコーディネーターの人員配置
- (7) 研修・勉強会の参加、資格取得にむけた取り組み
- (8) エコツーリズムプログラムの検討と試行
- (9) 地域活性化に向けた住民への普及啓発
- (10) ルールの検討
- (11) ター滝における観光の仕組みづくり

※平成 24 年度大宜味村エコツーリズム人材育成基礎調査（方針）業務報告書より抜粋

基本理念には、「エコツーリズムを中心とした若者に魅力的な産業の創出」・「環境保全型の観光振興」とあることから、本計画ではエコツーリズム展開は経済振興のみならず、世界自然遺産登録予定の自然を有する本村の村づくりにも繋がるものとする。このことから上記の項目を整理し、以下のような基本方針を設定する。

①ガイドを育成し、自然や文化などの地域資源の特性を活かし、世界自然遺産地域に期待される環境保全型エコツーリズムプログラムを提供することが望まれている。

そのためには、村全体が地域資源を持続的に活用し、適切な管理を行っていくことが求められる。

そのような村ぐるみで環境を保全しようという状況をつくり出すためには、②村民を対象に地域資源である自然・文化への理解を広げる活動も必要になる。

村民自身が、村の魅力をより正しく認識することで、村にプライドを持ち、訪れる人々と接し、村の将来を考えることになる。それにより、エコツーリズムを核とした地域活性化を進展させることが可能になる。

その他、案内板の設置や観察施設の整備など観光客を受け入れるための③エコツーリズムを核とした環境づくりも早急に行う必要がある。

#### (基本方針)

①ガイドを育成し、環境保全型エコツーリズムプログラム提供する。

②村民を対象に地域資源である自然・文化への理解を広げる。

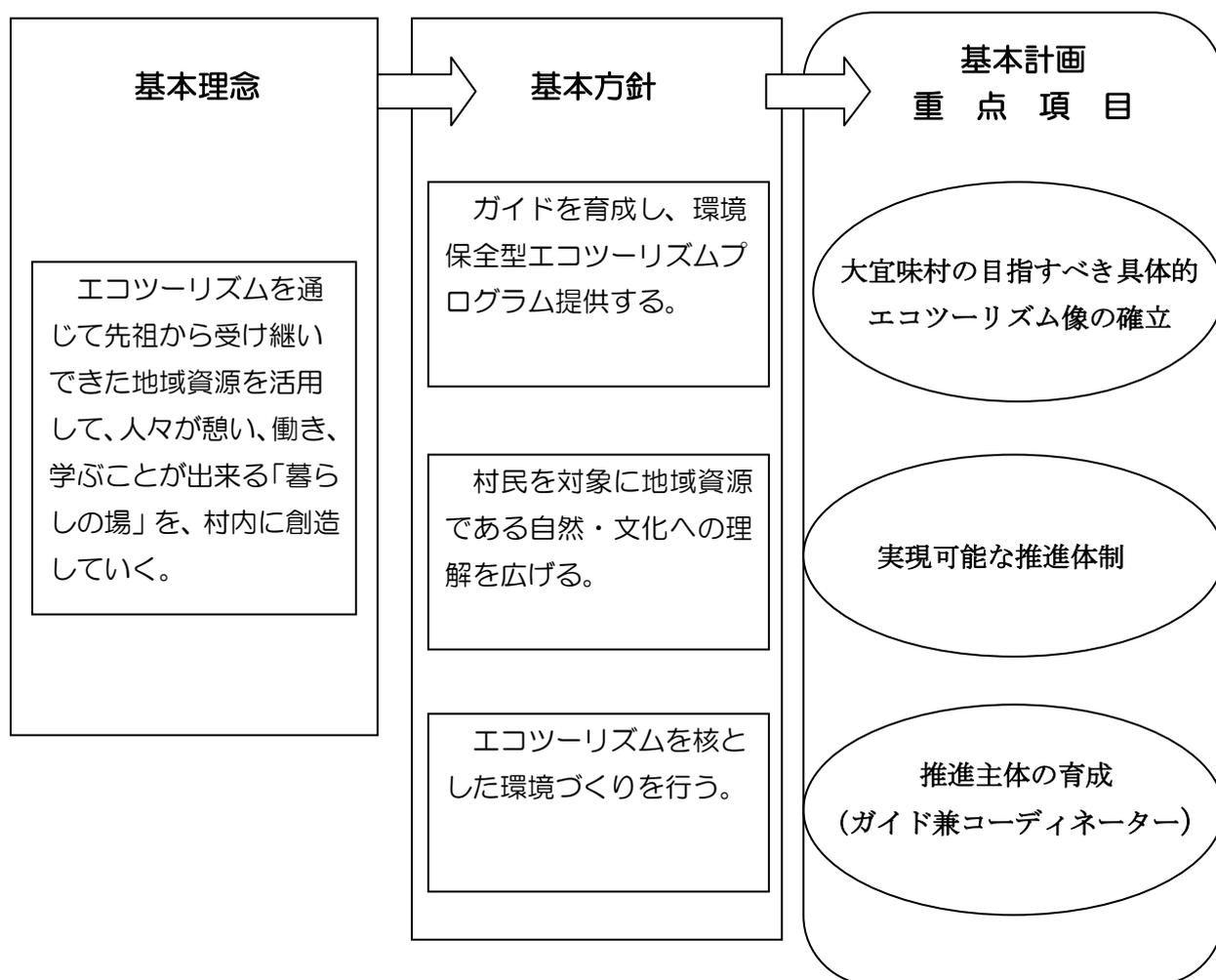
③エコツーリズムを核とした環境づくりを行う。

## 2) 推進主体育成の必要性

このように、村内の魅力的な自然や文化を保全・活用できる推進体制を早急に確立させ、エコツーリズムを核とした村づくりを進めていくことが強く求められているが、本村においては、行政や事業者、地域を繋ぎ、計画を推進していくことが出来る大宜味村エコツーリズムの「推進を行う主体」は育っていない。

「推進を行う主体」とは、現在までに策定された大宜味村観光振興計画や、大宜味村エコツーリズム全体構想に基づいた「持続可能な観光地づくり」を自ら行い、大宜味村エコツーリズムを「若者にとって魅力ある産業」として実現させていく、「ガイド兼コーディネーター」のことである。

このことから、大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画においては、目指すべき具体的エコツーリズム像の確立と、これを可能にする推進体制の整備、推進主体（ガイド兼コーディネーター）の育成に重点を置き、検討を行う。



## 5.大宜味村の目指すべき具体的エコツーリズム像と方向性

大宜味村エコツーリズム人材育成基本理念、基本方針と先進地調査から得られた成果を合わせ、村の具体的なエコツーリズム像とする。

また、エコツーリズム象を具体化していく方法として、基本方針であるガイド育成、エコツーリズムの環境づくり、村民への地域資源の保全・利活用の啓発の目標を以下の様に設定する。

### 1) 大宜味村のエコツーリズム像と目標の概要

大宜味村のエコツーリズム像	
	大宜味村エコツーリズムでは、ガイドが村の魅力を十分に伝えるエコツアーを行い、エコツーリズムを魅力的な産業として成り立たせること、そして地域の人々の協力を得ながら保全活動を進め、最終的にはエコツアーが行われる地域全体の活性化を成し遂げるものとする。
①ガイド育成の目標	地域の歴史や暮らし、自然の魅力を再発見し、楽しく紹介できる知識と人間的魅力を持ち、同時に環境保全に配慮したエコツーリズムを通して地域の問題を解消して地域活性化を行うことが出来る人材を育成する。
②村民への地域資源の保全・利活用の啓発の目標	環境教育を通じて身近な自然にふれあう機会を増やすとともに、エコツーリズムを通して、他地域との交流を活発にする。これらを通じて自然や文化に恵まれた地域の重要性に気づく村民をふやし、地元を誇りに思う気持ちをさらに醸成させる。
③エコツーリズムの環境づくりの目標	世界自然遺産の候補地であるやんばるの自然と共生することを目的に、希少な生きものが棲む環境を適切に保全および回復を行う。里地においては地域の人々の暮らしに配慮し、様々な人々が訪れ、自然や文化と触れ合い、楽しみ・学ぶことが出来る環境づくりを行う。

## 2) 目標の詳細

### ①ガイド育成の目標

(世界自然遺産地域に期待される環境保全型エコツーリズムプログラムの提供)

大宜味村においては、推進主体が自立を目指し、本村の魅力を伝えるエコツアーを行い、その結果エコツーリズムを産業として成り立たせることが大切である。

そのためには、大宜味村エコツーリズムの基本理念を十分に理解し、ツーリズムを行う地域の人々の協力を得ながらツーリズムを進めることにより、様々な課題に気づき、これを積極的に解決していくことが必要である。

また、世界自然遺産に登録されようとしている本村の自然資産を積極的に活用するツーリズム方法論を確立することが重要である。それは従来の貴重な生物にはなるべく近づかないという姿勢から一歩進み、慎重に保護しながらもツーリズムや教育にも活用するという姿勢への変換である。そのためには地域住民の参画や行政の指導力も重要であるが、何よりも優れたガイドを如何に育成するかが鍵となる。

ガイドは地域の人々との話し合いから、地域の資源を魅力的に伝えるプログラムづくりをはじめ、ツアーのルール、環境保全に配慮した適切な自然環境の利用方法の検討や、活用する環境の継続的なモニタリング方法を構築する。

このような取り組みの在り方が、本村の目指す、「環境保全型の観光振興」を成し遂げると考える。

#### ○環境保全型のエコツーリズムの実施（プログラムづくり・ツアーの実施など）

- ・地域活性化を目的とし、地域事情に即した環境保全型のエコツーリズムを実施する。

#### ○保全・制限基準を定める（ツアーのルール・環境保全のルールづくり）

- ・地域環境を守るエコツアーのルールや集落内の環境保全基準を定める。

#### ○環境の管理を行う（モニタリング）

- ・ツアーや環境保全活動、環境づくりを円滑に進めるために、継続的な自然環境のモニタリングを行い、科学的な評価に基づいた環境管理を行う。

## ②村民への地域資源の保全・利活用の啓発の目標

(村民を対象に地域資源である自然・文化への理解を広げる)

本村では、長い歴史を持った数多くの文化財や、世界自然遺産に登録が検討される豊かな自然環境を「持続可能な形」で活用する「環境保全型の観光振興」が求められている。そのため、村民に地域資源である自然や文化への関心を高めてもらい、環境づくりや観光事業についてともに考え、参画し、村の観光振興を進める必要がある。

地域資源への理解を広げる活動の一つとして、環境教育が考えられる。村内の喜如嘉小学校で25年にわたり伝統的に行われ、村内外より高い評価を得ている野鳥教育がある。喜如嘉小学校では「自分の故郷の自然環境の良さを発見し、大切に思う気持ちが芽生えることで、子ども達の心に地域に対する誇りを育む」ことを目的にした野鳥観察活動が、全校児童参加で継続的に行われている。

この在り方を村内の小中学校全体へ広げ、児童が自然や文化と触れ合う機会を今以上増やすことで、親世代も含めた地域全体の地元資源への理解の底上げが可能になると考える。

また、今後のエコツーリズムの環境整備を進める中で、積極的に地域の人々や村外の協力者の参加を募り、世界に期待される環境保全型の持続可能な観光地をつくり出していくこととしたい。

### ○環境教育（カリキュラムづくり・観察会の開催）

(小学校)

・身近な環境に生息する野鳥やチョウなどの生きものに、継続して親しみ観察する活動を通し、地域の自然を知り大切に思い、さらにそれらの自然がある地域を誇りに思う児童を長期的な視野を持って育成する。

### ○エコツーリズムや環境づくりへの参加（推進体制の構築・ネットワークづくり）

・エコツーリズムや環境づくりへ、地域の人々やボランティアの参加を募り、世界に期待される環境保全型の観光地をつくり出す。

### ③エコツーリズムの環境づくりの目標

(エコツーリズムを核とした生きものとふれあう環境づくり)

自然を資源として観光を推進する本村においては、ヤンバルクイナやノグチゲラなどに代表されるヤンバルの生きものが集まる環境づくりと、生きものと身近に触れ合える観察小屋などの施設整備を行い、自然の魅力を引き出せるエコツーリズムのための環境づくりを推進することが必要である。

やんばるの生きものが集まる豊かな自然とそこに暮らす人々の生活が共生できる大宜味村型エコツーリズムの環境を整備していくこととしたい。

#### ○生息環境づくり

・里地においてヤンバルクイナやノグチゲラなどに代表されるヤンバルの生きものが集まる生物多様性の高い生息環境づくりをする。

#### ○観察施設づくり

・生きものと身近に触れ合える観察小屋などの施設整備を行い、双眼鏡などの機器がなくても自然の魅力を実感できるようなエコツーリズムのための環境づくりを推進する。

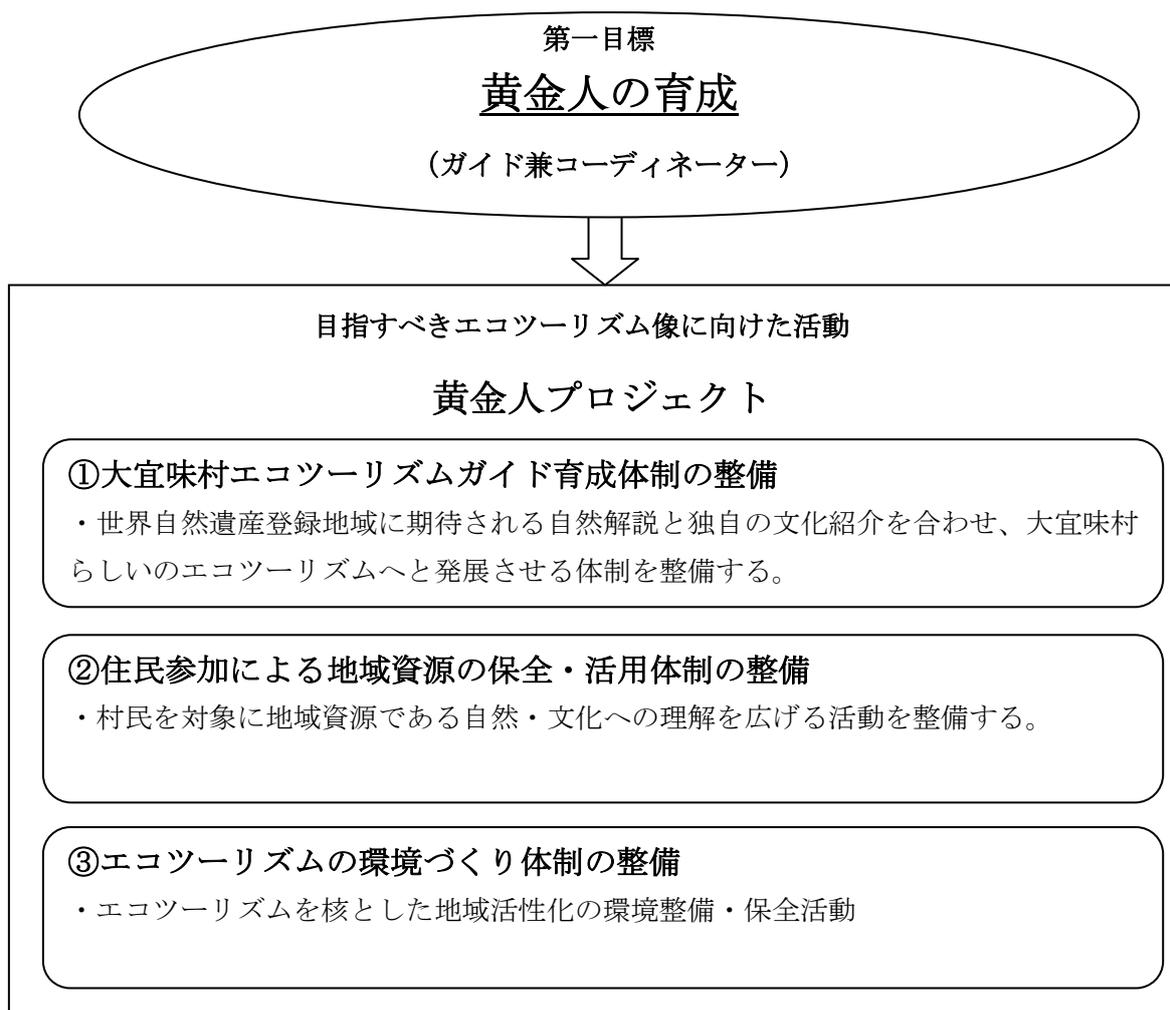
## 6.目指すべきエコツーリズム像にむけた推進体制「黄金人プロジェクト」

本村における目指すべきエコツーリズム像の実現にむけた、推進体制について設定する。本村の目指すべきエコツーリズムを成功させるためには、ガイド育成、環境づくり、保全活動を継続的に行う必要がある。

さらに世界自然遺産登録を見据えて村にふさわしい環境共生型エコツーリズム体制を目指すことから、環境保全や世界自然遺産について、国内はもとより海外とのネットワークの構築を行い、ガイド育成や保全活動を高いレベルで行えるように努める必要がある。これら目指すべきエコツーリズム像へと推進する体制も整備する必要がある。

本村はシークワサーの名産地であり、その品種は黄金（くがに）とも呼ばれることから、これからの本村における将来的なエコツーリズムの担い手を「黄金人（クガニンチュ）」と呼ぶこととし、大宜味村エコツーリズム人材育成計画を「黄金人プロジェクト」として実施する。

黄金人プロジェクトの第一目標は、推進主体であるガイド兼コーディネーター（黄金人）を育成することである。



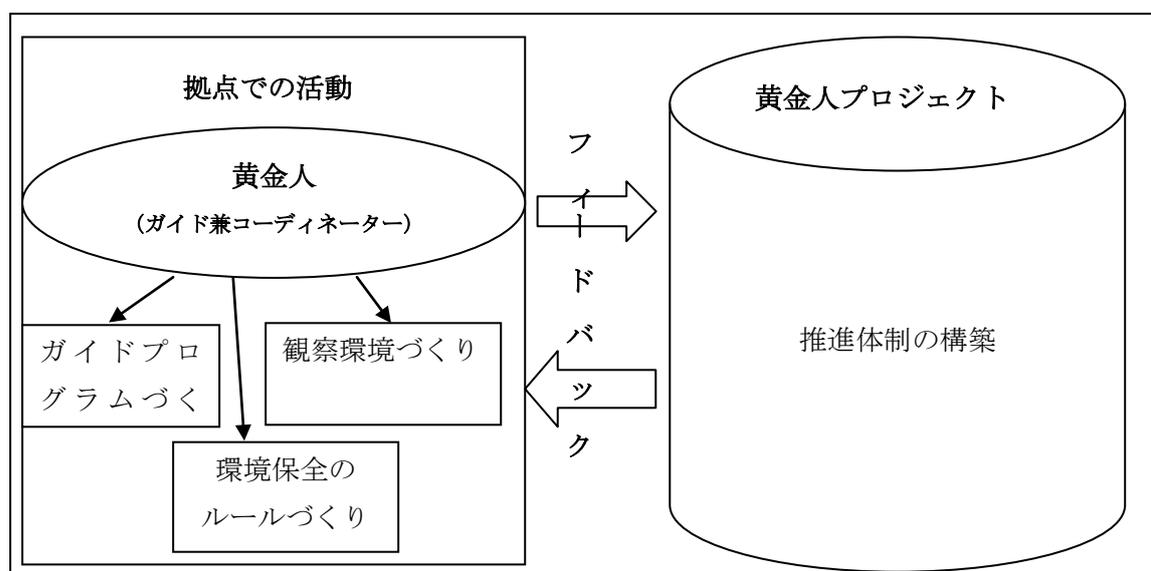
## 7.黄金人（クガニンチュ）の育成と拠点の役割

### 1) 黄金人（ガイド兼コーディネーター）の育成

大宜味村エコツーリズムとは、まず主体となる黄金人（ガイド兼コーディネーター）が実際にエコツアーを行い自立できる収入を得られるようになること、そして地域の人々の協力を得ながら活動を進め、最終的にはエコツアーが行われる地域の活性化を成し遂げることである。

しかしながら現在、実践を基にした育成プログラムも大宜味村エコツーリズムを推進する具体的な知識、方策は存在しない。

本計画ではまず具体的な活動を行う拠点を決め、黄金人（ガイド兼コーディネーター）を中心に実際に対象地域住民の理解を得ながらエコツアーの活動を実際に行い、ガイドプログラムづくり、環境保全のルールづくり、案内板の設置や観察環境づくり、環境教育や普及活動などを具体的に進める中で黄金人（ガイド兼コーディネーター）が育成されるとともに、実践から得たノウハウの蓄積により本村にふさわしいエコツーリズムの推進体制を構築していくこととする。



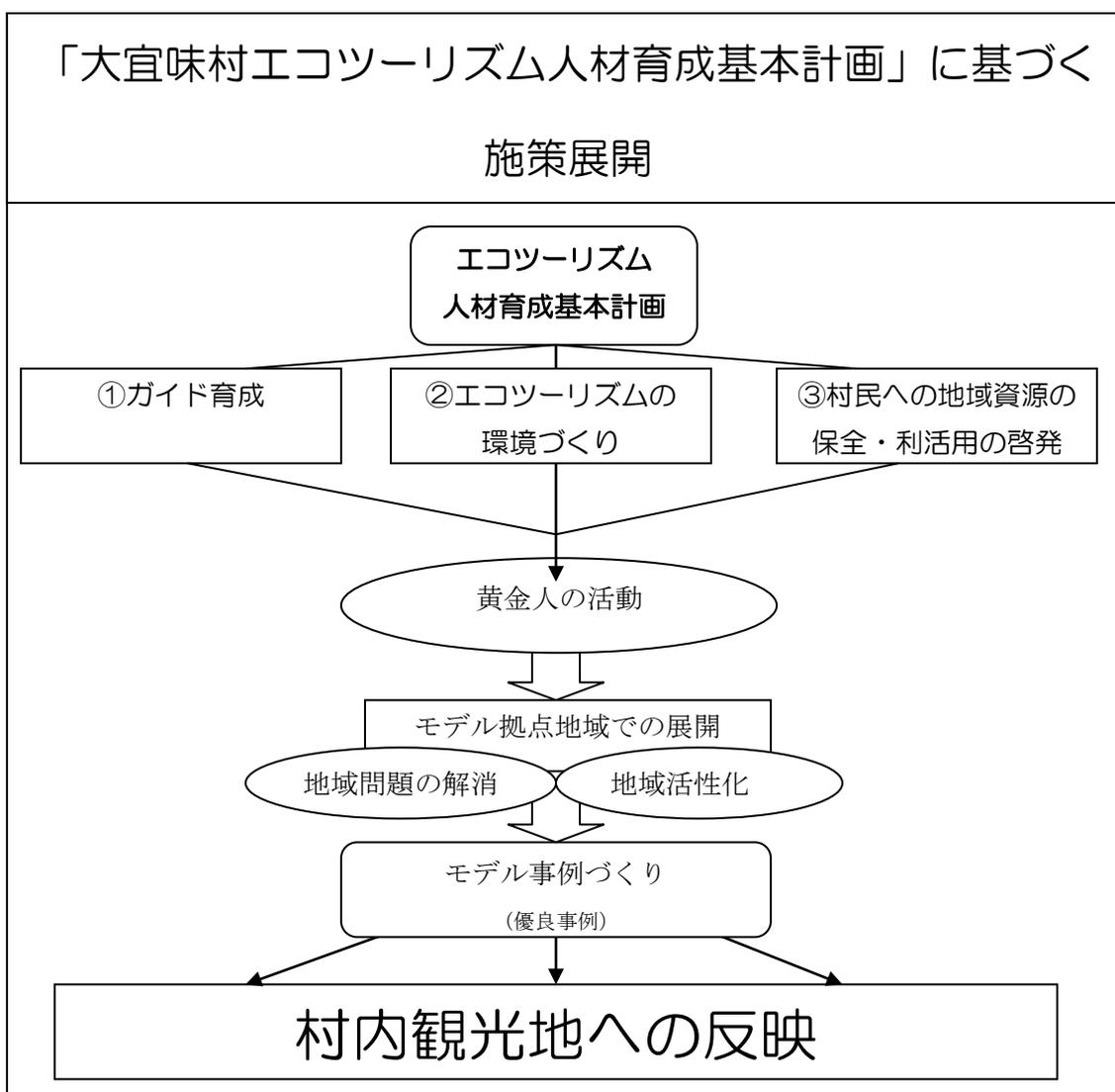
## 2) 拠点の役割

拠点とは、黄金人（ガイド兼コーディネーター）の育成と推進体制の実験を行う場のことである。そこがエコツーリズムによる地域活性化のモデルとなる。

拠点は訓練の場であるとともに、大宜味村エコツーリズムの方法論を検討し、モデルとなってゆく場所である。

拠点では黄金人（ガイド兼コーディネーター）の活動を通じて村内に「エコツーリズムを核とした地域活性化」の成功事例をつくり、得られたノウハウを基にエコツーリズム推進体制を完成させ、村全体に波及させる。新しい試みを大規模で開始させることは現実的ではなく、可能な場所で小規模から開始し、成功例を一つずつ積み上げて一つのモデルとし、それを順次全体に広げる方が、計画実現の可能性としては高いと考えられる。

これにより、先祖から受け継いできた地域資源をエコツーリズムを通じて活用し、人々が憩い、働き、学ぶことが出来る「暮らしの場」を村内に創造していくことが期待され、「体験滞在型・交流プログラムの実現」へと繋がる計画づくりに至る。



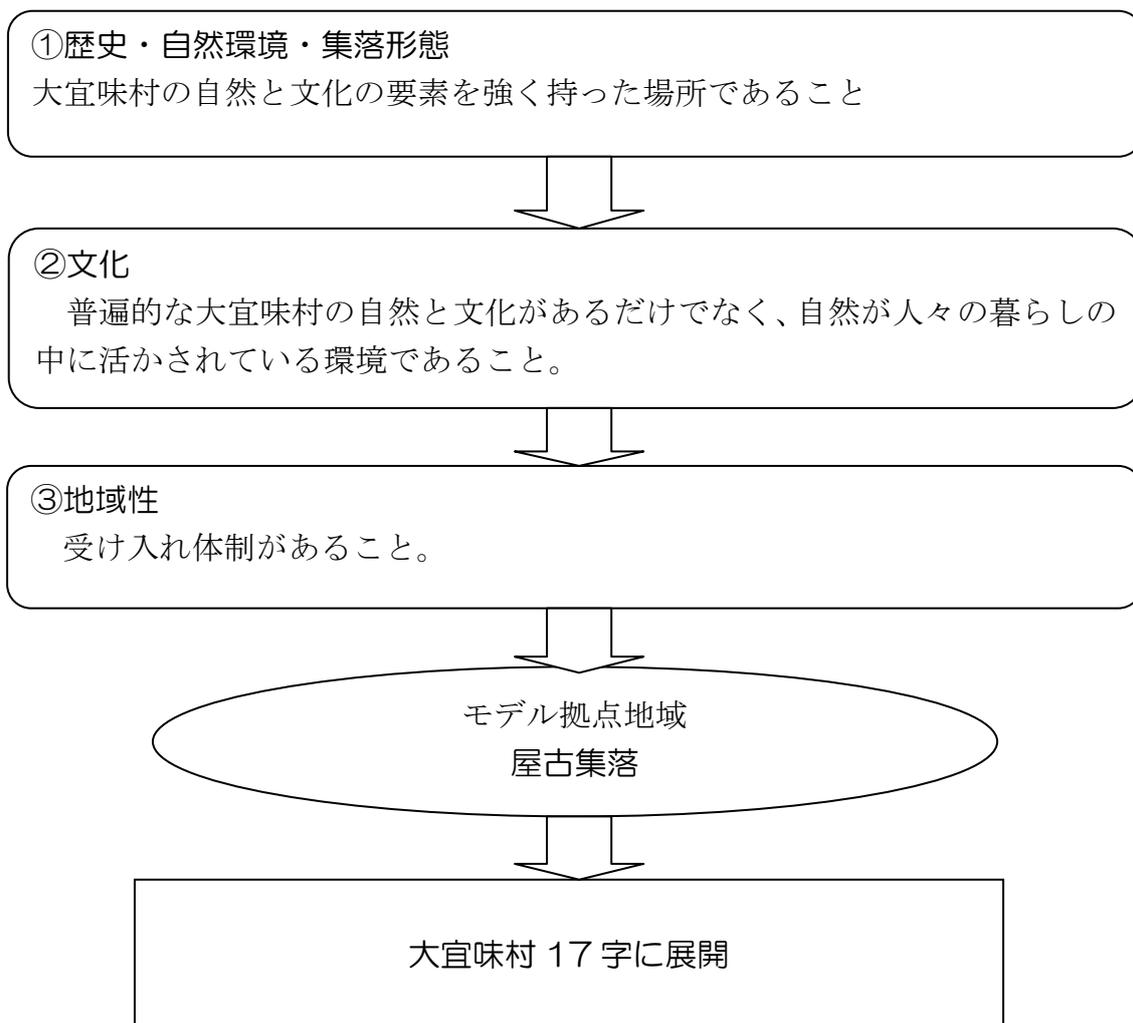
### 3) モデル拠点地域の選定

「拠点の役割」から黄金人（ガイド兼コーディネーター）のトレーニング場所として以下の条件を基に、本事業におけるモデル拠点地域を選定する。

やんばる三村の中で大宜味村の魅力は、「豊かな自然とその自然と人の暮らしの関わりから生まれた文化」である。これらを活かす取り組みこそ、村が目指すエコツーリズムとなる。

そのために、黄金人（ガイド兼コーディネーター）を育成する拠点は、①「大宜味村の自然と文化の要素を強くもった場所」であり、いま現在も②「人々の暮らしが営まれている場所」。そして③「来訪者を受け入れる体制がある場所」の三つが揃っていることが望ましい。

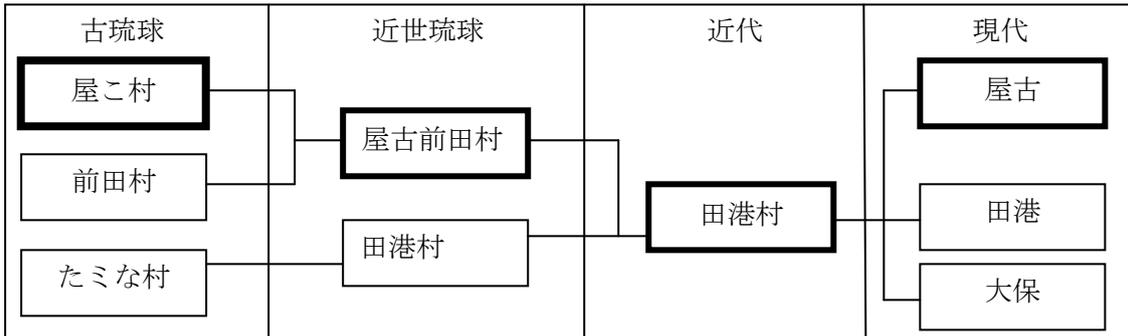
大宜味村では最北端の田嘉里区から最南端の津波区まで、各 17 カ字の地域が、個性的で各々の特長をもっている。しかし上記の三要素に最も適合するのは屋古であるため、本事業では、この要素を特に強く持った各集落の里地の中から、計画策定のためのモデル拠点地域としてまず「屋古集落」を選定し、具体的な実証を進めることとした。



## 8.モデル拠点地域としての屋古集落の特徴

### ①歴史・自然環境・集落形態

屋古集落は塩屋湾北側に位置する集落で、東隣りの田港とヤフ・タンナと併称される。もともとは国頭間切りに属していたが、1673年に田港間切りに編入され1682年より大宜味村間切りとなった。17世紀末に道一つ隔てた前田村と合併して屋古前田村となる。1903年に田港村の一部となったが、1930年に再び屋古として独立した。



集落背後には急峻な山がせまり、その山間を縫うように奥手に入り組んだ形で集落が形成されている。小規模にまとまった集落である。古民家が多くあり、古い集落の面影を残している。

集落南側を流れるウフヌハー沿い、集落周囲の平坦地及び山の斜面を明けた段畑が農耕地となっている。現在の集落近くは自家菜園（アツタイグラー）として活用されている他、段畑を中心にシークワサーが植えられている。また集落近くにはノグチゲラを初め、コノハチョウやフタオチョウなど沖縄を代表する希少な生きもの達が生息するほか、季節を問わず多くのチョウを観察することが出来る。

コンパクトな集落でシークワサーを中心に一次産業が営まれており、人々が関係した様々な自然環境が存在するため、多種多様な生きものを里地の近くで観察することが出来る。



写真1：畑周辺でみられたノグチゲラの巣



写真2：シークワサー畑のコノハチョウ

## ②文化

屋古は塩屋、田港、押川、大保、江洲、白浜など塩屋湾を取り巻く 7 集落とともに「塩屋湾のウンガミ」（沖縄県北部に分布するウンガミを代表する行事・国指定重要無形民族文化財）を共有している。

塩屋湾のウンガミでは、田港から始まり、次に屋古を拝み、塩屋へと移動する。祭場となる屋古の神アサギは、アサギ広場の中心に太い柱を立て、その柱を中心に、クムー（藁で編んだ日よけ）を張り、さらに周辺には、芭蕉の葉で作られた屋根が張り巡らされ、地面には芭蕉の葉が敷き詰められる。ウンガミでもっとも注目される勇壮なハーリー競漕は、屋古集落に各集落からのハーリー船が集まり、カミンチュを乗せ一斉にスタートし塩屋を目指す。このように屋古は今現在も沖縄固有の文化が息づく場所である。



図 1：ウンガミ範囲図



写真 4：ウンガミ 屋古アサギの様子

屋古集落はウンガミを通じて塩屋湾の各部落と関係をもつ集落であることから、塩屋湾一帯の文化的要素を学ぶことができる。

集落の主要な場所には拝所を初め、様々な文化的施設がある。神アサギ、屋古のクサティガミ、ワハヌル、ハーミヌマー等があり、これらは隣部落である田港との関係が深い。

集落の墓地は、塩屋湾北岸の最奥部にあたるメーレーと呼ばれる一帯にあり、屋古、塩屋、田港、押川、大保の人々で使用している。屋古集落の東側にはその共同墓から独立し、新規に建立された墓もある。

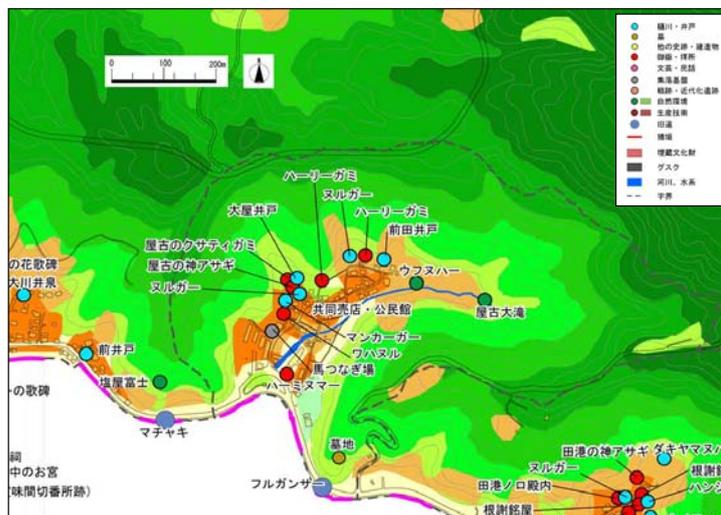


図 2：屋古周辺の文化財

「大宜味村文化財基礎調査および歴史文化基本方針策定事業報告書」より抜粋

図 屋古の地域資源

### ③地域性

「平成 23 年度地域生物多様性保全計画策定調査業務報告書 環境省・大宜味村」では、屋古地域には外の人を受け入れ地域活性化を図る集落の気質があることが読み取れる。

○聞き取り内容：集落の活動、行事を今後継続、発展させて行くには何が必要か

聞き取り対象：屋古区民

- ・ 行事や活動の後の親睦会
- ・ 部落内のコミュニケーションが大切
- ・ 集落の事業をつくり、地域を活性化させたい。
- ・ 屋古は環境にめぐまれており、平和的な環境に癒される人も多いと思う。
- ・ 65 歳以上の人々が安心して暮らし、訪れることができるホスピタリティある集落づくりで診療所、大学機関と連携をとりながらヘルスツーリズムのサービスとして打ち出す

(平成 23 年度地域生物多様性保全計画策定調査業務報告書 環境省・大宜味村) より抜粋

また、現在塩屋小学校自然観察クラブにおいて、屋古をフィールドとしてチョウの観察会を開催している。参加している児童は屋古集落の子ども達も多い。地域の人々の協力で、フィールドとなるシークワサー畑を含む恵まれた環境下での観察を行うことが出来る。屋古集落でのチョウ観察は今年度より始めたが、多くの子ども達がチョウの魅力にひかれ意欲をもって観察に臨んだので、国頭地区少年児童科学作品展では銅賞を受賞している。このように、屋古区では観察を通して地域資源の活用についての理解が広がりつつある。



写真 5：シークワサー畑での観察



写真 6：樹液に集まるチョウの観察



写真 7：集落内での観察



写真 8：チョウの撮影

## 9.モデル地域におけるワークショップ型講演会の結果

計画策定の一環として、エコツーリズムの課題、地域資源の発掘・活用方法を明らかにし、地域住民へエコツーリズムへの理解を広めることを目的としたワークショップ型講演会を実施した。

このワークショップは、実際にエコツーリズムガイド人材育成の拠点としてモデル地域となっていく屋古区で実施することで、地域における課題を明確化し、基本計画策定に反映させることを目的として行なった。

### 1) ワorkshop型講演会のスケジュール

■開催日時：平成 25 年 1 2 月 1 4 日（土）

■開催場所：屋古集落および大宜味村内

目的	時間	内容
①大宜味村内の観光資源視察	8：30～12：00	講師による村内の観光資源視察 平南川（ター滝）・六田原展望台 大保ダム周辺・笑味の店
②屋古チョウ観察ツアーの試行	13：00～14：00	講師が屋古集落を下見し、プログラム試行を目的とした集落の観光資源の選定を行なった。
	14：00～16：30	チョウ観察を中心とした屋古集落の自然文化のティータイム付ツアー ※野外パブメニュー ・アカバナ茶（シークッカーサー）・国頭紅茶・からき茶・コーヒー・ ・オリオンビール（中瓶）＆おつまみ（ラッキョの塩漬け・パン・チーズ）・サーターアンダギー・ヨモギモチなど
③講師による講演会・意見交換会	19：00～21：30	地域住民を対象にエコツーリズムへの参加を促す講演会・意見交換会を開催。 ①講演会 1 講師 室瀬秋宏 「大宜味村のエコツアー実現にむけて」 ②講演会 2 講師 坂田英明 「地域資源の活用について」 ③意見交換会

### (1) 大宜味村内観光資源視察の結果

大宜味村には多くの魅力ある観光資源が存在する。年間5万人の人々が訪れるター滝、六田原展望台は東シナ海を一望できる風光明媚な展望が広がり、石灰岩林の散策道の入口にもなっている。大保ダムはやんばるでも珍しい複雑な湖面を橋が繋ぐ美しい景観がある。そして村内外からも高い評価を受ける笑味の店など、一部を取り上げただけでも大宜味村の観光地としての潜在的価値の高さがわかる。しかし、現状ではこれらの観光地を地域活性に結びつけるにはいくつかの課題がある。

ター滝は多くの人々が訪れるものの、ゴミや排泄物、利用者のマナーの悪さなどが問題となっており、地域の利益となっていない。

また、六田原展望台や大保ダムは風光明媚な場所だが、現在利用者は多くない。今後多くの人々に来てもらえる活用方法について検討が必要である。

### (2) 屋古チョウ観察ツアーの結果

屋古の集落を散策し、自然と文化を楽しんでもらうとともに、やんばるの食材と食器で地域に親んでもらうツアープログラムを行なった。プログラム作成にあたっては屋古住民に協力を依頼して資源発掘を行なった。屋古の人々の暮らしや自然との付き合い方など、様々な話をプログラムやルートに反映させた。参加者からの反応としては、集落の自然や文化の良さ、野外でのお茶会とメニューの減農薬栽培のシークワサーを使ったハイビスカスティが評価されるなどツアープログラムの構成に関しては概ね好評を得た。しかし、ガイド方法では、民話を取り入れるなどして、地域を知らない人々にも自然や文化に対して興味をもって親んでもらう工夫が必要であるとの意見が出た。

### (3) 講演会の結果

室瀬氏からは、訪問者を大切にすること。また来たいと思わせるツアーを組むこと。具体的な方法として地域の観光地をリンクさせ、「自然」「人」「食（ご馳走・沖縄産）」「器（沖縄産）」を非日常的空間で楽しめるような工夫をする旨のアドバイスを頂いた。

また、エコツーリズムを地域活性化に結びつけるには、主体となる「ガイド兼コーディネーター」が自らエコツアーの具体的な販路づくりや、問題解決に着手することが必要であることも話された。

坂田氏からは、地域資源を活かした観光をする上で大切なこととして、いかにお金を落としてもらうことを考えられるかについてアドバイスを頂いた。

例としては、年間130万人を超す人々が訪れるという、景観に優れた並び合う二つの地区の話である。人が来ることでゴミやトイレの問題が発生していると捉えた方は、観光の受け入れ態勢が整わず、現在も来訪者は通過型で利益になりにくいと捉えている。一方、足止めしてお金を落としてもらうことを考えた方は、通過する来訪者を対象にする商売から始め、次第にホテルや滞在体験メニューを用意するなど態勢が整って行った。訪問者に

対する認識が結果として大きな違いが出ることを考えさせられた。

まずは人が来ている場所に注目することの大切さ、次に沖縄に来ている人を大宜味村に立ち寄らせる方法を考えること。次に新しい物を作るのではなく地域で愛されている食事を出すこと。そしてまた来たいと思わせる仕組みを考えること。最後に成功の秘訣はピンチをチャンスに変えることであると話された。

#### (4) 屋古地区での聞き取り結果

##### ① ツアーのマナーについて

・ 来訪者は常識的に振舞ってくれれば良いと思う。集落内にはパパイヤなど、人のものや拝所など地域で大切にしている物もある。それらが無くなったり壊れたりしなければ良い。

集落でのマナーだが、まず拝所や地域で暮らす人々に敬意を持つように言ってから集落に入れてほしい。

##### ② 受け入れ人数について

・ 一度に 100 人などの大人数は困る。20 名位ならば良いと思う。生活に影響のない人数であれば問題ない。

##### ③ ツアーコースについて

・ ルートについてはツアーでやったアサギ～裏道～各ウガンジュを見てもらうのが良いと思う。屋古の良い風景を見れる。ハブには気をつけて。

##### ④ 観光・黄金人（ガイド兼コーディネーター）に期待すること

・ 観光を通じて、屋古を良い場所にしてほしい。部落の問題を解消して地域を救うというコンセプトで進めてほしい。

・ 地域のいいものを売るような仕組みを作してほしい。

・ 自分たち集落で暮らす人々は例えるなら「木」だと思う。地域に根を下ろし、小さい頃からお互いの顔をよく知っている人達と、どこにも行かず同じ場所で 70 年 80 年と歳を重ね、倒れる時もこの集落で倒れる。若い人はヤマシシと一緒に美味しいものを探してあっちこっちに行く。それはそれで良いと思う。しかし、何か屋古を魅力と思ってくる人の何人かでも屋古の集落に根を下ろして、「木」になってほしい。

そして年を重ね、屋古の伝統を引き継ぐ大木に育ってほしい。そんな大木が 2、3 本あればそこから種が飛んで、木が増えて行くと思う。村を支える大木になってほしい。

## 2) ワークショップ型講演会のまとめ

ワークショップ型講演会の結果から、黄金人（ガイド兼コーディネーター）には、今後エコツーリズムによる地域活性化を行っていくために次のことが求められている。

現在大宜味村に訪れる人々に着目し、問題を解消して地域活性化に繋げるとともに、自らの見識を高め、ガイドテクニックを磨きながら多くの人びとが大宜味村に足を運び、楽しめる大宜味村の観光資源を結びつけたプログラムづくりを行っていくことである。

そのために今後は、モデル拠点地域ではガイドテクニックを高めるためさらに研究するとともに、聞き取りやモニタリングを通して地域資源の発掘を行い、地域の人々と話し合いながらツアーのルールや、エコツアーを通して地域の問題を解消し、活性化に結びつける方法を検討し、実際に訪問者を迎え入れるエコツアー開催に向けて作業を進める。

そして観光地であるター滝については、ゴミなどの地域の問題を解消して、ター滝のある津波区の地域活性化に結びつける働きかけをすること。次に、六田原や大保ダム、笑味の店などに代表される村内の魅力的な観光資源とリンクさせて、多くの人々が大宜味村に訪れるようなプログラムづくりを行っていくことが求められている。



写真 9：屋古チョウ観察ツアーの様子



写真 10：野外パブの様子



写真 11：講演会の様子



写真 12：意見交換会の様子

## 10.地域課題の整理と今後のモデル地域での活動

ワークショップの意見交換会および、聞き取り結果から抽出された屋古地区のエコツーリズムを進める上での課題を、大宜味村エコツーリズムの考え方により整理し、今後の方向性を示すとともに、モデル地域での具体的な活動に繋げていく。

### 1) 課題の整理と方向性

#### ○課題

- ・屋古集落の環境のすばらしさを理解し、地域の景観や自然環境を損なうことなく将来にわたり活用できるよう地域資源の保全をはかることが必要
- ・屋古の里地の自然の良さを知ってほしい
- ・利用にあたって、地域資源のモニタリング体制がない
- ・暮らしや文化の記録を残したい
- ・エコツーリズムを実施していくルールがない
- ・環境保全に即したシークワサーなどの栽培のあり方を知りたい
- ・エコツアーの来訪者がルールを守るか心配
- ・ハブが出ることがあるので安全面が心配
- ・地域の季節の特産品を販売したい
- ・過疎化が進んでおり、地域に住む人が増えてほしい。しかし、どんな人が住むか不安
- ・地域活性化を行う人々の繋がりを作り、話し合いの場が必要

#### ○方向性

##### ①エコツアーの開催

モデル拠点地域である屋古の地域活性化を目的に、集落の魅力を堪能しつつ、村内の観光資源をリンクさせて多くの人々が大宜味村に訪れることを目的としたプログラムを作成し実施する。プログラム作成にあたっては、地域の自然と文化に興味を持ってもらえるガイド方法の確立を目指すとともに、地域の特産品を販売できるよう現在閉じられている屋古売店の活用の仕組みを検討する。さらに、来訪者が屋古集落に魅力を感じ、移り住みたくくなるような地域住民との交流のあり方を黄金人（ガイド兼コーディネーター）が中心となって検討する。

##### ②保全・制限基準の検討

屋古集落の環境を将来にわたり活用できるよう地域資源の保全を目的に、ツアーにおけるガイドラインと、集落の環境保全基準作成についての検討を行う。また、保全にあたっては現在、屋古集落にある文化財や自然環境についてわからない部分があるため、聞き取

りやモニタリングを進め、地域資源の把握に努める。さらに、今後モデル地域となっていく屋古集落には今まで以上に来訪者が訪れ、移り住むことを希望する人が出ることも想定されるため、先進事例から移住についてのルールを検討を進める。また今後、集落にエコツアーの環境づくりを進めるにあたっては、動植物の専門家に相談しながら植栽する植物や、ハブなどの危険動物の取り扱いについても知識を深めていくこととする。

### ③環境づくり

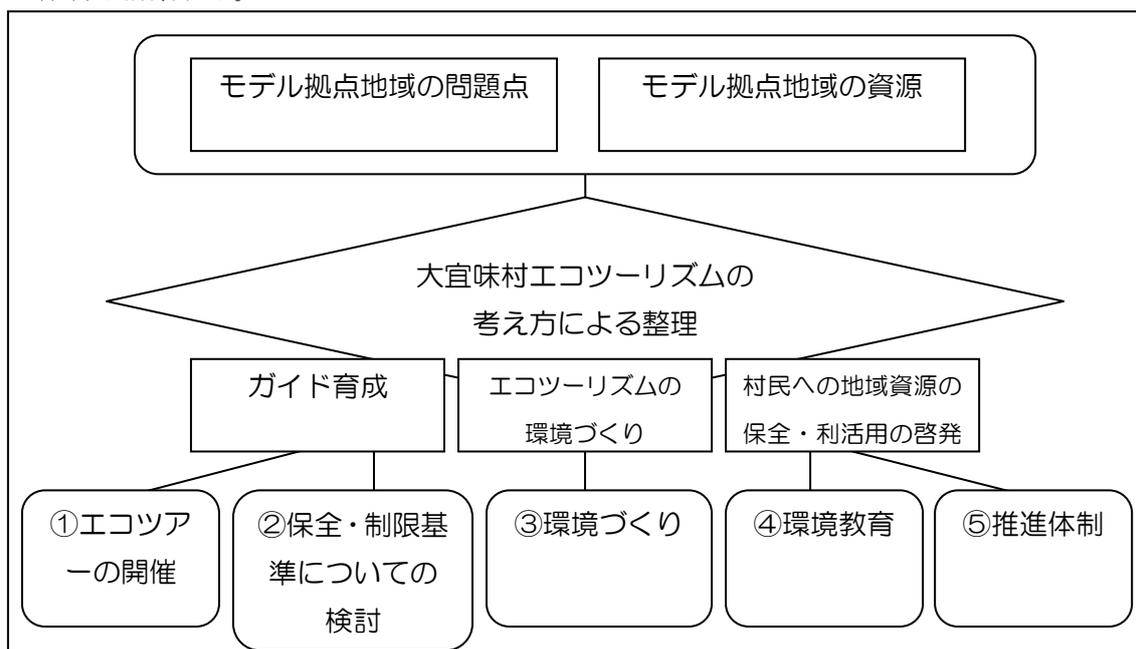
屋古地区のエコツアーにむけた環境づくりを目的に、集落内でバタフライガーデンを作っていく。これにより、民家周辺の路傍、林縁部、シークワサー畑など多様な環境に飛び交うチョウを見ることが可能になり、エコツアーだけでなく、地域の環境学習にも活用し、これにより多くの人びとが屋古区を訪れるようになるなど地域活性化が期待出来る。植え付ける予定の食草と吸蜜植物の選定にあたっては専門家の意見を仰ぐとともに、植栽場所についても集落内でよく協議を行い決めることとする。なお、育成は地域の塩屋小学校と連携して行うことを検討する。

### ④環境教育

屋古地区および塩屋校区における村民への地域資源の保全・利活用の啓発を目的に、塩屋小学校児童を対象としたチョウ観察会を開催する。

### ⑤推進体制の構築

大宜味村エコツーリズムの推進にあたっては、関係者が話し合う場づくりや、情報収集や広報の一元化が必要となる。そのために屋古区をフィールドとする黄金人（ガイド兼コーディネーター）が中心となり、地域の人々とともに屋古区におけるエコツーリズムの推進体制を構築する。



## 2) 活動の内容

### (1) エコツアーの開催

モデル拠点地域である屋古の魅力を堪能しつつ、村内の観光資源をリンクさせて多くの人々が大宜味村を訪れることを目的としたプログラムを作成した。

なお、このプログラムは26年度以降に旅行代理店を通じて募集を行い、モニターツアーを実施する予定である。

#### ■ツアー名：チョウの里フットパスツアー（例）

行程	時	プログラム	場所
	10:00	フットパス	屋古集落
	12:00	東シナ海を眺めながらのランチ (笑味の店・まかちくみそーれー)	六田原展望台
	13:30	フットパス	六田原散策道入口 ～ 屋古集落旧道
	15:30	シークワサーとコノハチョウの里 屋古集落散策&アフタヌーンティー	屋古集落
	18:30	交流会&長寿鶏バーベキュー	屋古公民館
料金	未定 含まれるもの：ツアー、食事代、宿泊代（1泊2食）		

■モデルツアーの実施予定日：平成26年6月下旬

■対象人数：15名

■募集方法：旅行代理店

## (2) 保全・制限基準の検討について

地域への聞き取りに加え、「大宜味村エコツーリズムの環境づくりの目標」を基に、屋古区における環境保全に向けた地域への働きかけとツアーの制限基準、ガイドライン作成の検討を行っていく。ガイドラインの検討にあたっては、「平成21年度大宜味村エコツーリズム推進全体構想作成調査報告書」の大宜味村エコツーリズムガイドラインを参考に作成するものとする。なお、作成にあたっては、自然環境や集落環境の保全の専門家を顧問として進めるものとする。

### エコツーリズムの環境づくりの目標

世界自然遺産の候補地であるやんばるの自然と共生していくことを目的に、希少な生きものが棲む環境を適切に保全する。里地においては地域の人々の暮らしに配慮し、様々な人々が訪れ、自然や文化と触れ合い、楽しみ・学ぶことが出来る環境づくりを行う。

## ・エコツアーガイドライン、環境保全ルール検討項目

### ①エコツアーをする上でのルール（案）一部

- プログラム作成においては、エコツアーの人数、ルート、滞在時間など事前に集落の了解を得るものとし、プログラム終了後、来訪者の感想等地域へ情報をフィードバックし情報の共有を行う。また集落の地域活性化に結びつくようにプログラムを作成する。
- 屋古の集落ツアーには必ず地域のガイドが同行し、集落散策を行う。
- ウンガミなど地域の伝統文化や行事、地域の民話などを紹介し、屋古集落が神聖な場所であることを理解してもらうとともに、親しみをもってもらえるようガイドを行う。
- 保険（傷害保険、損害賠償保険等）には必ず加入し、プログラムを実施する。
- ハブの多い集落であることから、有害動植物に関する知識や応急処置の方法を習得し、必要な救急用品を備えておく。

### ②将来にむけた環境保全ルールと調査方法の検討

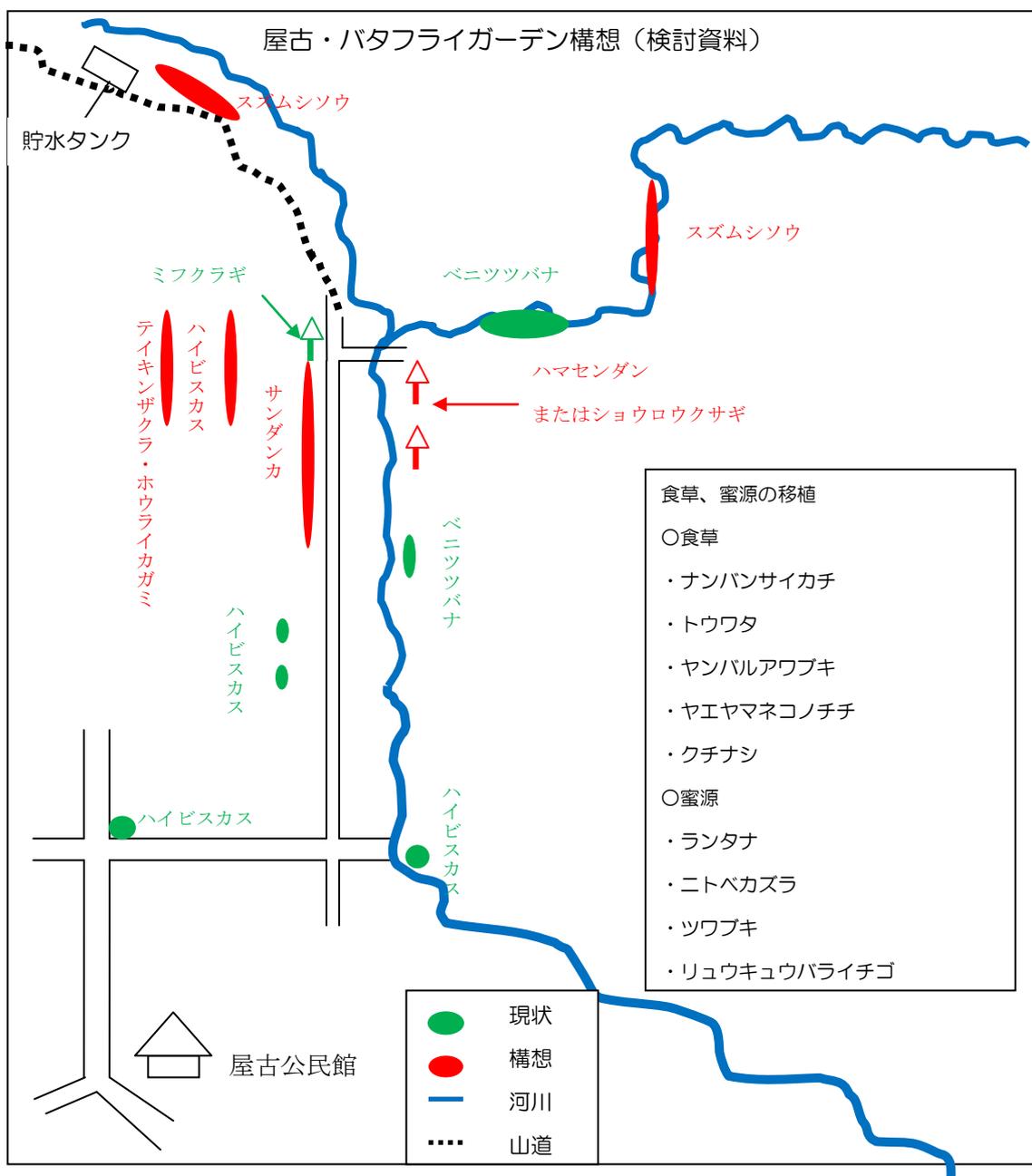
- ・ゾーニング（私有地や公共地の区分け、使い方についての区分け）
- ・地域の歴史、生きもの調査の方法（どこに何があるか自然資源の把握）
- ・地域での植栽（種や苗をやんばる地域産を使うなど）
- ・シークワサーの栽培方法
- ・屋古区への入居方法や土地の売り買いについての決め事

### (3) 環境づくりについて

#### 屋古・バタフライガーデン構想（検討資料）

屋古のツアープログラム作成を進める中で、この地域では多くのチョウが見られることがわかった。チョウを屋古でのエコツアーの中心テーマにしていくために、屋古地域全体をバタフライガーデンとして整備し、チョウを呼ぶための環境づくりを行う。

これにより、民家周辺の路傍、林縁部、シークワサー畑など様々な環境に飛び交うより多くのチョウを見ることが可能になり、エコツアーだけでなく、地域の環境学習にも活用でき、多くの人びとが訪れるようになって地域活性化が期待出来る。植栽する食草と吸蜜植物の育成は、地域の塩屋小学校と連携して行うことを検討する。



#### (4) 環境教育について

##### 塩屋小学校自然観察会におけるチョウ観察会

屋古地区および塩屋校区における村民への地域資源の保全・利活用の啓発を目的に、塩屋小学校児童を対象としたチョウ観察会を開催する。

チョウ観察という具体的な活動を通して自分達の地域を知り、地域の自然を大切にする心を育み、「考える力」「生きる力」を育て、将来持続可能な地域づくりを支える地域の担い手の育成を行う。

手法としては、村内の喜如嘉小学校で25年にわたり伝統的に行われ、村内外より高い評価を得ている野鳥教育のカリキュラムを応用し、屋古地域でよく見られるチョウを観察対象として地域に親しむ環境教育を行う。

具体的には、黄金人（ガイド兼コーディネーター）が塩屋小学校に働きかけ、屋古集落を観察地として、自然観察クラブでの年10回程度の観察会と、児童を対象とした夏休みを中心としたチョウ観察連続講座を開催する。

この取り組みを核として、観察の行われる屋古区やこれを含む塩屋校区、そして村全体へと地域資源の保全・利活用の啓発を図る。



写真 13：塩屋小学校児童の写真 1



写真 14：塩屋小学校児童の写真 2



写真 15：塩屋小学校児童の写真 3



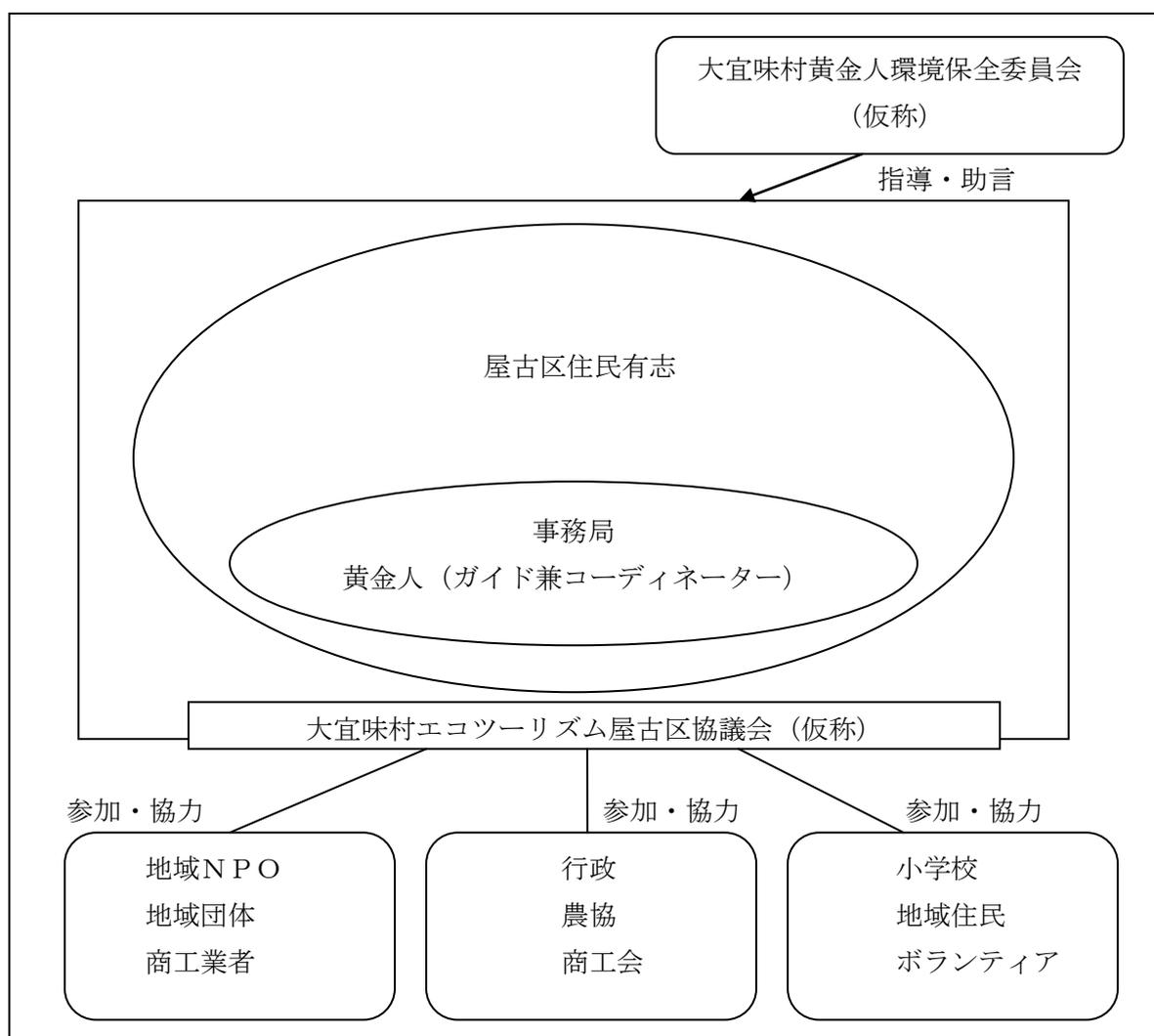
写真 16：塩屋小学校児童の写真 4

### (5) 推進体制の構築

今後の活動に向けて以下のような推進体制を提案する。

大宜味村エコツーリズムの推進にあたっては、関係者が話し合う場づくりや、情報収集や広報の一元化が必要となる。そのために屋古区をフィールドとする黄金人（ガイド兼コーディネーター）が中心となり、地域の人々とともに屋古区におけるエコツーリズム推進体制を構築する。

構成メンバーは、黄金人（ガイド兼コーディネーター）、屋古区地域住民有志からなり、その他協力団体として地域 NPO や商工業者、商工会、農協や行政、地域小学校なども考えられる。また、地域に関心をもって協力を行う地域住民やボランティアは、自由に参加できる仕組みとする。村全体の計画を推進する村行政や大宜味村黄金人環境保全委員会は、専門知識をもって必要に応じて、指導・助言を行うことが出来るものとする。



### 3) 次年度以降の計画

屋古集落での次年度以降の取り組みを以下に示す。プログラムづくりは、本年度の作成したものを来年度開催予定のモデルツアーを通じて高めていく。また、これらを行う推進体制の構築を進め、保全・制限基準の検討を行うとともに、バタフライガーデンをつくり、地域の人人々ともにエコツアーリズムの受け入れ態勢を整える。

区分	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
プログラムづくり	—	—	—	—	—
モデルツアーの実施		○ 6月下旬	—	—	—
保全・制限基準の検討	—	—	—	—	—
環境づくり		—	—	—	—
環境教育		—	—	—	—
推進体制の構築		—	—	—	—

## 11.大宜味村エコツーリズム人材育成の推進体制

### 1) 推進に向けた各主体の役割

本村におけるエコツーリズム将来像の実現に向けて、この計画を総合的かつ計画的に推進するためには、村民・黄金人（ガイド兼コーディネーター）・村の積極的な取り組みはもちろん、協働による取り組みが欠かせない。

この計画の推進及び進行管理をするための組織体制は以下の通りとし、それらを円滑に運営、連携させていくことで、この計画の実行を確保する。

#### 大宜味村黄金人環境保全委員会（仮称）

「大宜味村黄金人環境保全委員会」は村行政の諮問機関であり、自然環境及びエコツーリズムにおいて実績のある有識者、学識経験者と本計画に関係する課の職員によって構成される。

この委員会の役割は、エコツーリズム人材育成基本計画の進捗状況について点検・評価し、見直し方針などを検討し村に提言する。また、世界自然遺産登録にむけて今後必要とされる大宜味村エコツーリズムを進める上での、自然環境の保全等の施策に関するゾーニングやルールづくりなどの基本的事項、環境に著しい影響を及ぼす事項について、多面的に審議する。また各集落の推進体制に対し、必要に応じて指導・助言を行う。

#### 各集落の協議会

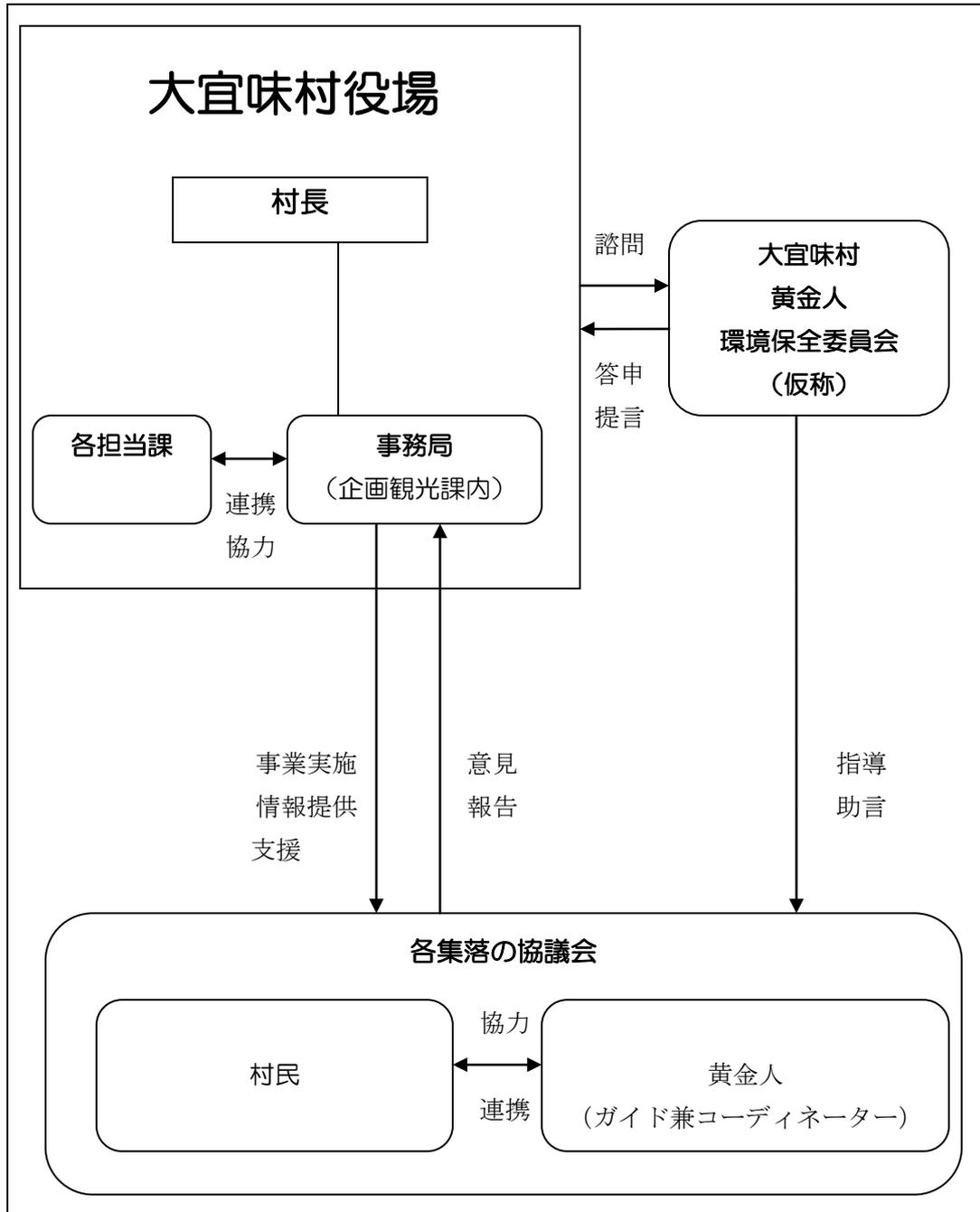
各集落における村民・黄金人（ガイド兼コーディネーター）を大宜味村エコツーリズムに関する取り組みの推進組織として位置づける。この推進体制の役割は、「計画推進に向けて地域での活動の輪を広げ、村民、事業者、村行政の協働体制構築に向け取り組む」「村民・事業者が協力しあい、計画の実現に向けて取り組みを行う」こととする。

#### 各担当課

村行政の各担当課は、必要に応じて環境関係の個別計画の策定や見直しについて「大宜味村黄金人環境保全委員会」に諮問し、より具体的な取り組みを推進する。

#### 事務局（企画観光課内）

事務局は「大宜味村黄金人環境保全委員会」を運営し、各集落の推進体制からの報告、意見などをまとめ、「大宜味村黄金人環境保全委員会」の意見を聞き、黄金人プロジェクトの計画全体の見直しを行う。



図：大宜味村エコツーリズム人材育成の推進体制

## 2) 計画の進行管理

本計画における目標達成にむけて着実に推進していくためには、PDCA サイクルの考え方にに基づき、取り組みを点検・評価し、定期的な見直しを行っていくことが重要である。

### (1) Plan (計画)

目標を踏まえて年次の取り組み計画を作成する。

### (2) Do (実行)

村は年次の取り組み計画に基づき、施策を推進するとともに、村民、黄金人（ガイド兼コーディネーター）への啓発、情報提供と支援を行い、各集落の推進体制の活動を推進する。

### (3) Check (点検・評価)

大宜味村エコツーリズム環境保全委員会は「大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画」に基づき、取り組みの達成状況や、年次の課題について調査・審議する。

### (4) Act (見直し)

村は、大宜味村エコツーリズム環境保全委員会の審議結果を受け、次年度の計画づくりに反映させていく。

## 12.今後の展開

屋古集落をフィールドに目指すべきエコツーリズム像を推進していく実動的な人材の育成主体の育成を行い、目指すべきエコツーリズムの体制整備に繋げる取り組みを図っていく。

村の自然や文化を知り、地域資源の活かす方法を蓄積し、各種団体間の情報の共有や、行動の連携を促す仕組みや手立てを整えていく。

平成  
25  
年度

### 実動的な推進主体の育成（第1目標）

#### 黄金人（ガイド兼コーディネーター）の育成

##### 1. ガイドプログラム（案）の作成

屋古集落を中心とした具体的なガイドプログラムを作成する。作成にあたっては、専門知識を持つ方々を顧問とし、自然と文化についての資源の掘り起こしを行い、プログラムを作成する。

活動の広がり

### 地域への働きかけ（第2目標）

#### ガイドプログラムの試行

モニターツアーを開催し、エコツーリズムを展開する。

#### エコツーリズムの環境づくり

多くの人々が訪れ、自然や文化と触れ合い、楽しみ・学ぶことが出来る環境づくりを行う。

#### 村民への地域資源の保全利活用の啓発

村民が本村の自然・文化の魅力や問題を理解し、村づくりに参加できる。

活動の広がり

### 他地域への働きかけを行う（第3目標）

～ター滝・ネクマチヂ・その他～

## 黄金人（ガイド兼コーディネーター）の完成

平成  
26  
年度  
以降

## 第3章

### 現地視察・先進地調査

### ワークショップ型講演会報告書



### 3-1 喜如嘉小学校 全校野鳥観察視察会報告書



平成 25 年 10 月

写真 1：喜如嘉小学校全校野鳥観察

## 喜如嘉小学校 全校野鳥観察視察会報告書

### 1.概要

#### (1) 日時・場所

日時：平成 25 年 10 月 18 日（金）午前 8：30 時～11 時 30 分

場所：大宜味村立喜如嘉小学校

#### (2) 参加者

参加者：黄金人検討委員 5 名中 2 名（山城春江・稲福智裕）

喜如嘉小学校教諭（知念 巧）大宜味村（藤田元也）

#### (3) 視察会の目的

本村は、今後予定されているやんばるの国立公園化、世界自然遺産登録を念頭に村の地域活性化を目指している。その為には大宜味村全体が国立公園にふさわしい環境作りなど地域の受け入れ体制を構築する必要がある。今後展開するエコツーリズムを核とした観光・交流を行っていく為には、ガイドやツーリズム関係者だけでなく、ツーリズムが行われる環境で暮らす住民の理解と協力が欠かせない。

その為、地域環境への理解と関心を高める具体的なモデルケースとして、村内喜如嘉小で伝統的に行われ、内外より高い評価を得ている野鳥教育を研究するための視察を行う。

視察後、大宜味村にふさわしい自然環境への理解、関心を広げる為にはどのような方法が考えられるか意見交換会を行った。

#### ○喜如嘉小学校 野鳥観察のとりくみ

地域在住の環境教育専門家である市田豊子氏の働きかけにより、喜如嘉小学校は 1988 年から現在まで、隣接する喜如嘉タープクに飛来する鳥を伝統的に観察してきた。2012 年の第 47 回全国野生生物保護実績発表会（主催・環境省、日本鳥類保護連盟）では最高賞である環境大臣賞を受賞している。

NO	時間	内容	場所
1	8：45	<b>全校野鳥観察（視察）</b> 全校児童による野鳥観察	喜如嘉タープク
2	10：20	<b>観察のまとめ（視察）</b> 児童による野鳥観察のまとめ	喜如嘉小学校 多目的室
3	10：50 ～ 11：30	<b>意見交換会</b> 指導教諭 2 名に参加して頂き、委員と事務局による意見交換会を開催した。喜如嘉小学校の野鳥教育への取り組みと効果について、指導教諭に聞くほか、大宜味村にふさわしい自然環境への理解関心を広げる為にはどのような方法が考えられるか、意見交換を行った。	喜如嘉小学校 多目的室

## 2.視察結果

1年～6年までの全学年の児童が5班に分かれ、各班は各学年の混合で編成されていた。高学年は低学年に自ら観察方法や野鳥について教え、低学年は高学年の様子を見て学んでいく。児童達は観察についてお互いで意見を出し合い、自主的に楽しみながら野鳥観察に参加していた。観察後は教室で各班ごとにまとめを行った。児童の代表は観察できた野鳥を、科、種に分けて発表することが出来ていた。25年にわたる野鳥教育の成果が児童達の野鳥に対する取り組みに表れていた。

### 1) 喜如嘉小学校野鳥教育の取り組みについて

#### (1) 野鳥教育（環境教育）の目的

喜如嘉小学校野鳥観察の目的は、地域の自然を大切にする心を育み、「考える力」「生きる力」を育てる事にある。野鳥観察という具体的な活動を通して自分達の地域を知り、地域に誇りを持つ児童達を育成する事が大切にされており、更には持続可能な地域の利活用の担い手の育成を目指している。その為、対象は喜如嘉小学校全校生徒としている。他地域で行われている少数の意識の高い児童を中心に自然の知識を身につけさせる講習のあり方とアプローチは異なるが、喜如嘉小学校野鳥教育では、児童が自発的にフィールドを探索するほどの興味を引き出す事に成功しており、結果的に多くの児童たちに自然の知識を与える事が出来ている。

#### (2) カリキュラム

喜如嘉小学校の野鳥教育は、地域の環境を野鳥を通して継続的に観察することで「地域を知る」活動を行っている。またカリキュラムは、6年間を通じて児童を育成することが考えられている。内容は、各学年の発達段階に合致した指導内容となっており、それぞれが1年間を通じた長期的なものである。これが喜如嘉小学校野鳥教育の特徴であり、一過性の自然観察会やワークショップなどとの大きな違いである。

#### (3) 環境教育専門家の役割

環境教育専門家が目的にむけた児童の育成を、長期的な視野をもってカリキュラムを組み、児童の成長の段階に応じて、さらに興味をもてる手立てを用意している。

珍しい鳥を観察した時なども、メディアを通じて情報を発信したり、学んだ成果を発表する場を作り意欲を高め、児童の興味が出てきたところで、その時に必要な国内外の各分野の研究者の招聘などを行っている。このことから環境教育専門家には、児童達を育成するための長期的な視野を持ったカリキュラムを作成出来ること、さらに研究者や専門機関と地域を結びつけるコーディネーター的能力が求められる。

## 2) 意見交換会内容（喜如嘉小学校教諭 山城春江・知念巧）

### （1）喜如嘉小学校野鳥教育の取り組み

・25年間にわたる継続は、観察環境・環境教育専門家のすべてが地域に揃っていた事である。子供達が興味を失わず、身近な環境に関心を持つことが出来たのは、必要な時に身近な専門家のアドバイスを聞く事が出来き、探究心を保つことが出来た事。また児童の家族などが営む農家や地域の人々の協力があった為と考えられる。（山城春江）

### （2）児童への影響

・6年間の野鳥観察を通じて、ただ鳥を見るのではなく、フィールドであるターブクの事を大切に考える子が育っている。（山城春江・知念巧）

・早朝、ターブクで児童達が自主的に野鳥観察を継続させ、科学展に出品するためのまとめまで行う事ができている。

また、台風で野鳥の保護を訴える看板が壊れた場合にも、児童達が回収し修復している。  
（山城春江）

・外部の人々が水田を訪れた時に、野鳥の名前を教える事が、誇りにつながっている。自分達の地域の生き物を紹介し、評価されることは地域を誇りに思う気持ちを育てている。  
（山城春江・知念巧）

### （3）野鳥教育の学校での活用

・地域資源である自然環境を、「野鳥観察」という子ども達が魅力を感じやすい活動を通じて学ばせるようにしている。子供達の強い興味を引き出した上で、国語や算数、図画などに応用、活用し、「考える力」を養う取り組みをしている。はじめは意見発表や作文の内容を思いつかない子供達も、野鳥教育を通じて地域を知る事で、自分の意見、考えを持つことが出来るようになってきている。村の童話大会に発表する児童が、「おじいちゃんが作っているオクラレルカの畑に来る野鳥の事を、孫の私が発表したい」と話すなど、野鳥観察が自分の地域を考える入り口となっている。（山城春江）

・大切にしたいのは、地元の良さを聞かれたとき、すぐ答える事ができる児童を育てたい。成長した時も地域に誇りをもち、地域を語る事ができるように。

具体的な活動を通して自分達の地域を知り、考える事が「生きる力」の源である「アイデンティティ」を育む。（山城春江・知念巧）

・成人した卒業生も、かつて観察した水田の環境が気になって見に来ること。また野鳥を見て季節を感じるなど、野鳥観察が生まれ育った地域を感じる接点となっている。  
（山城春江）

・地域を知り、誇りに思い、大切に思う事ができる児童が成長し、福祉や一次産業、土木や教育など様々なスペシャリストとして大宜味村に関わることで全体が底上げされ、村を良い方向に導いていくと考える。(山城春江・知念巧)

#### (4) 地域活性化やエコツーリズムなどへの関わり

・地域にエコツーリズムができる仕事場があれば、卒業生たちも多く関わると考える。やんばるには環境に関わる仕事がない。仕事場があれば関われる。

例えとしては環境省のマングースバスターズがある。雇われる人々は誇りをもって作業に参加していると感じる。

これが地域活性化をすすめる産業であればさら多くの人々が事業に参加すると考える。まずは具体的に環境に関わる仕事場を作ることが大切だと感じる。(山城春江)

・エコツーリズムを成功させて、やんばる地域の過疎化を食い止めてほしい。その為にも多くの人を訪れてくれるように、地域の自然の魅力を保ちながら、地域が活性化するエコツーリズムを行う必要がある。(山城春江)

## 喜如嘉小学校全校野鳥観察視察の様子



写真 2：出発前に紙芝居を使った野鳥の説明



写真 3：フィールドでの野鳥観察



写真 4：高学年が低学年へ教える



写真 5：各班の観察のまとめ



写真 6：班代表のまとめ発表



写真 7：意見交換会

### 3-2 先進地視察報告書



平成 25 年 10 月

写真 1：軽井沢ピッキオ

## 1. 視察概要

---

- (1) 期間 平成 25 年 10 月 10 日 (木) ～13 日 (日)
- (2) 視察対象地 東京都・千葉県・長野県
- (3) 参加者 特定非営利活動法人やんばる舎  
宮城 良治  
市田 豊子  
増田 耕平
- (4) 調査先 東京都立東京湾野鳥公園 (東京都)  
谷津干潟自然観察センター (千葉県)  
ピッキオビジターセンター (長野県)
- (5) 視察方法 関係者からの実査およびヒアリングによる



写真 2：谷津干潟自然観察センター

## 2. 視察目的

本村は、特に亜熱帯森林に特徴づけられる自然遺産が、独特の文化遺産と絡み合って存在感を持つ地域である。したがって大宜味村らしいエコツーリズムでは自然、文化を併せてガイドできる人材の育成が望ましい。具体的には美しい自然を通して地域の魅力を発信できるガイド育成・運営体制、訪問者を迎え入れる環境づくりと地元の世界自然遺産登録にふさわしい地域づくりをする必要がある。

このことから、現在国内の第一線で活動する団体関係者に対しての実査およびヒアリングを行い、黄金人検討委員会に反映させるために当該視察を行うものである。

### ●視察対象地について

先進地域組織名	目的	内容
東京都立東京湾野鳥公園	環境づくり	<p>24.9haの土地に河川の中流から下流までの環境が再現されている。</p> <p>かつては遠浅の海であったが、1960年代後半か埋め立てが始まり、埋め立て後、地面に雨水がたまって池や原っぱができ、そこを野鳥が来る公園として人工的に造成して現在の公園となっている。公園内には野鳥を観察する為の工夫がなされていて、双眼鏡がなくとも野鳥を近くで観察できるハイドなども設置されている。</p> <p>公園全体が人工であり、観察地およびエコツアーの舞台となる観察環境を作る際のモデルケースになる。</p>
谷津干潟自然観察センター	ボランティアの活用	<p>干潟周辺は自然生態観察公園として観察路などが整備され、周囲に約3.5kmの観察コースもあり、谷津干潟自然観察センターが設けられている。</p> <p>干潟の保全や渡来鳥類の観察・記録、来場者への案内、望遠鏡の貸出、保全活動に携わるボランティア等の活動拠点になっている。</p> <p>建物内に限り、入場料が必要。また淡水池や公園も併設されており、オナガなど陸上の野鳥が生活する場にもなっている</p>
ピッキオビジターセンター	運営体制 ガイド育成	<p>ピッキオ（picchio=イタリア語でキツツキの意味）は、軽井沢を拠点に野生動植物の調査研究および保全活動を行うとともに、専門的なフィールド調査を実施し、高い評価を得ている。調査成果を一般旅行者にも楽しめるガイドに仕立てて実施していることから、エコツアーの成功例として広く知られている。</p>

### 3. 視察結果

#### 1) 先進地視察結果のまとめ

##### (1) 生き物の為の生息環境づくり

##### (エコツーリズムを核とした環境づくり)

先進地においては、多種多様な生きものが集まって来る環境と、生きものと触れ合える施設整備がされていた。

ピッキオにおいても、フィールドとしている「国設軽井沢野鳥の森」は、当初、カラマツの植林が進み、多彩な野鳥が生息する森ではなかった。この場所を星野嘉助氏（初代星野リゾート社長）を中心とする有志が、かつての変化に富んだ生物の多様な森にしようと、森林の伐採による草地づくり、池づくり、さらに国有林の作業道の整備をすすめ、現在の生きものの多く住む環境を作り出している。

この様なことから自然を資源として観光を推進する大宜味村においても、世界自然遺産に期待されるヤンバルクイナやノグチゲラなどヤンバルの生きもの達が集まる環境づくりと、生きものと身近に触れ合える施設整備をし、自然の魅力を引き出せるエコツーリズムのための環境づくりを推進することが必要である。

やんばるの生きもの達が集まる豊かな自然とそこに暮らす人々の生活が共生できる大宜味村型エコツーリズムの環境を整備していくこととしたい。

##### (2) 地域住民、ボランティアの活用

##### (村民を対象に地域資源である自然・文化への理解を広げる)

谷津干潟では将来にわたり「持続可能な形で」谷津干潟の環境を守るために、周辺住民と積極的に関わりながら、谷津干潟を知ってもらい、共に考え、干潟を維持する活動を行っていた。本村においても長い歴史を持った数多くの文化財や、世界自然遺産に登録が検討されるような素晴らしい自然環境を「持続可能な形」で活用する「環境保全型の観光振興」が求められている。その為には村民に地域資源である自然や文化への関心を高め、先ほど述べた環境作りや観光こと業について共に考え、参画をはかり、村の観光振興を進めていく必要がある。

地域資源への理解を広げる活動としては、村内の喜如嘉小学校で25年にわたり伝統的に行われ、内外より高い評価を得ている野鳥教育がある。谷津干潟のジュニアレンジャーの取り組みである「自分の故郷を自らの手で作り、守ることで、子ども達の心に地域に対する誇りを育む」ことを目的とした野鳥観察活動が喜如嘉小学校では全校児童参加で継続的に行われている。この在り方を村内の小中学校全体へ広げ、児童が自然や文化と触れ合う機会を今以上に増やすことで、親世代も含めた地域全体の地元資源への理解の底上げが可能になると考える。

また、今後のエコツーリズムの環境整備をすすめる中で、積極的に地域の人々や、協力して頂ける村外の人々の参加を募り、世界に期待される観光保全型の持続可能な観光地を作り出していくこととしたい。

### (3) 運営体制・ガイド育成

(世界自然遺産地域に期待される環境保全型エコツーリズムプログラムの提供)

大宜味村エコツーリズムの推進体制主体の在り方については、ピッキオの運営方法が大きなヒントになると考える。

ピッキオは「星野リゾート」の野鳥研究室としてスタートした。2003年からは独立採算制で運営するように求められたが、この状況がピッキオの積極的な運営の在り方につながった。

まず調査能力を活かし、地元行政の調査業務を受託するようになった。ツキノワグマと人の遭遇問題やアライグマ等外来種問題など、人と自然の接点で起こる問題が主な調査対象であった。そこから得られた調査結果を活かして、実際にクマが人里に入れないようクマ対策犬を飼育し配置する他、生物多様性を維持する為の草地の管理や、地域の小学校への環境教育など、生きものと人が共生できる環境づくりを行った。

つぎに、ガイド術としては軽井沢を拠点としていることから、訪れる一般観光客をエコツアーに誘導する為、ありふれた風景からも自然を楽しんでもらえるよう、豊富な調査知識を背景にしつつも、わかりやすく楽しませるガイド術の確立を行った。

このようにピッキオが自立する為に、積極的に地域問題や観光客と関わり活動を進めた結果、自社の存続の為の利益を確立したことに留まらず、住民にも感謝されながら、生きものと人が共生する環境を作り上げることに成功した。現在日本中からエコツーリズムの理想的な姿として高く評価されるに至っている。

大宜味村においても、推進主体が自立を目指し、大宜味村の魅力を伝えるエコツアーを行い、その結果エコツーリズムを魅力的な産業として成り立たせることが大切であると考ええる。

その為には、推進主体が世界自然遺産に期待される大宜味村エコツーリズムを目指し、ツーリズムを行う地域の人々の協力を得ながらツーリズムをすすめることで、様々な課題に気づき、これを積極的に解決していくことが必要である。

また、推進主体が世界遺産にも登録されようとしている大宜味村の自然資産を積極的に活用するツーリズム方法論を確立することが重要である。それは従来の貴重な生物にはなるべく近づかないという姿勢から一歩進み、慎重に保護しながらもツーリズムや教育にも活用するという姿勢への変換である。そのためには地域住民の参画や行政の指導力も重要であるが何よりも推進主体を如何に育成するかが鍵となる。

このような取り組みの在り方が、大宜味村の目指す、「環境保全型の観光振興」を成し遂げると考える。

## 2) 先進地視察詳細

### (1) 東京都立東京湾野鳥公園（視察）

訪問日時：訪問日時：平成 25 年 10 月 11 日（金） 15：00～17：00

先方対応：東京都立東京湾野鳥公園

#### ①野鳥の訪れる公園としての魅力を保つ～環境の創造・維持～

東京湾野鳥公園は、大井ふ頭南部地区の埋立地に出現した野鳥などの生息地を後世に残そうと立ち上がった地元住民や NGO、東京都の協働によって誕生した公園である。東京湾野鳥公園は、失われた東京湾奥部の自然環境をモデルに、多種多様な野鳥の生息環境を再生している。

再生された環境には非常に多くの鳥が訪れるようになっている。（120 種類前後）これらの環境は、すべて人口であるため、適切な管理がかかせない。

鳥達が訪れる環境を維持する為に、公園をモニタリングしながら環境作りを行っている。環境の変化に合わせて計画を練り直すなど手間はかかるが、試行錯誤をつみかさねて多くの生き物が生息できる環境を管理している。

#### 主な作業

①	ヨシ刈り	野鳥の子育てや休息の場を維持するため、水面面積を維持する為にヨシの刈り取りを行う。
②	泥湿地耕耘	水鳥の捕食場所・休息所・繁殖場の確保。トラクターによる耕耘
③	草地の草刈り	草地性の昆虫の生息場所の確保。



写真 3：センター前に野鳥の集まる小島が造成されている。数百の水鳥が群れる



写真 4：ヨシ刈りの様子

## ②野鳥を中心とした自然環境と都民が触れ合う場の提供

より多くの人々が身近に野鳥を感じることができるよう野鳥観察舎（以下ハイド）が設けられている。ハイドとは英語の「隠れる」という意味からきており、野鳥にストレスを与えず、かなり近い距離で観察が可能になる。

双眼鏡を持たない一般の人々に、野鳥に親しむ機会を提供している。



写真5：奥のハイドまで鳥に見られず進める様  
に目隠しがされている



写真6：ハイドの中。のぞき窓から観察する



写真7：ハイドからの風景



写真8：ハイドのから見える野鳥

## (2) 谷津干潟自然観察センター（ヒアリング）

訪問日時：平成 25 年 10 月 11 日（金） 10：00～12：00

先方対応：谷津干潟自然観察センター

（指定管理者）一般社団法人アーバンネイチャーマネジメントサービス

理こと CEPA 活動コーディネーター 芝原 達也

### ①センターの方針

・谷津干潟の保護に関してはラムサール条約登録地にしたことで、一応完了している。しかし時代とともに干潟の環境も変化してきている。従来の様に保護が中心で人を近づけない「ちかくて遠い谷津干潟」では未来にわたり環境を守ることはできないと考える。

2007 年から地域団体である現指定管理者が受託し、現在の方針でこと業をすすめている。未来にわたり谷津干潟の環境を守る為には、一部の鳥好きな人々だけでなく、近隣の多くの人々が関われる仕組みを作り、地域の人々とともに谷津干潟の環境について考えていくことが必要になる。

・初心者や自然に興味を持ち始めた人々を対象の中心に考え、普及に取り組んでいる。

・谷津干潟の周りに住む人々に谷津干潟に興味を持つ人々を増やし、環境に対する意識の底上げを図りたい。かつてそうであったように、谷津干潟が近隣の人々の生活と関わりのある大切な場所としていきたい。



写真 9：センター入り口



写真 10：案内板



写真 11：学習に訪れる近隣の小学生達



写真 12：センター内から保護区を見る

## ②具体的な取り組み

○ジュニアレンジャー（谷津干潟を通じて子供たちを育てる）

目的：将来の谷津干潟をまもる人々を育成する。

対象：近隣の小学生からの自由参加。段階に応じてカリキュラムを用意している。

### 段階別カリキュラム

STEP1	<b>自然遊び</b> 身近な自然と仲良くなる	好きな時にセンターに来てカリキュラムをおこない、終了するたびに判をもらう。（各ステップ全7間）
STEP2	<b>自然観察</b> 谷津干潟の生きもの、自然のおもしろさや楽しさを知る	
STEP3 リーダー	<b>干潟を知る</b> 野鳥カウント調査など <b>干潟を守る</b> 干潟のゴミ拾いなど <b>干潟を伝える</b> 来館者の案内など <b>交流活動</b> 国内・国外の交流など	主体的にイベントへ参加する。

世代の違う子供たちがともに学び、働くことで助け合う気持ちを育てたい。子供は大人になる準備をする段階。大人とともに仕ことをし、大人の姿に憧れて仕ことに興味を持つ。主体的にイベントに参加してもらい、仕こととして観察や清掃に関わってもらおう。

そして、交流活動に国内外の湿地の人々と交流したり、来館者から評価されることで、子供たちの気持ちが育つ。地域の子供たちがレンジャーとして谷津干潟にかかわり、家庭にもどった時に干潟のすばらしさを家族に伝えることで、保護者も谷津干潟に関心を持ってきている。

人間にはアイデンティティが必要だと思う。心にそれがなければ人はどうにでも流されてしまう。“自分”というものを育てようとした時に、故郷の風景というのは絶対になくってはならないものだと思う。子供たちが成長する中で、自分の故郷を自分たちの手で作り、守ることで、地域に対する誇りを持って欲しい。



写真 13：お知らせボード



写真 14：年間活動計画

## ○ボランティア活動

**目的：**地域の生きがいの場としてセンターの活用

**対象：**中学生以上

**資格：**観察センターボランティアとは、観察センターがおこなうこと業の趣旨に賛同し、自らの意志で、その知識や労力を提供する人（一年更新）

**支援：**活動のための機器や用品の貸出、研修の実施・保険加入

### 主な活動

①館内ガイドウォーク	館内をめぐり、展示物を使って谷津干潟の見どころを解説。さらに野鳥についても簡単な解説を行う。 ガイド希望者には講習制度がある。
②水鳥データ解析グループ	谷津干潟に飛来する水鳥のカウントデータを解析して、環境の変化を調べ、どのように水鳥の飛来数が変化しているか調査し、保全に役立てる。調べた内容を基に、来館者向けの展示物も作成する。
⑤図書グループ	図書コーナーでの本の整理や子供たちへの絵本の読み聞かせを行う。
⑥木工グループ	憩いの場にふさわしい、木製のテーブルやベンチを作成。館内の備品を製作。
⑦カービンググループ	館内展示用の木彫りの鳥を製作する。さらにセンターにおいて講師として「カービング教室」を開催する。
⑧ソロモンの指輪プロジェクト	大学生による子供向け観察会。野鳥をわかりやすく子供たちにレクチャーする。

・平成23年3月末現在の登録者数は131名。年齢層は中学生～70歳台

現在までの延べ人数は2,703名。

・自分たちの能力を活かし、好きなテーマで谷津干潟と関わってもらっている。退職したサラリーマンや主婦が多く関わっている。地域の生きがいの場としてセンターを活用したい。ボランティア活動は、観察センタースタッフがマンツーマンでサポートしている。ガイドなども、多くは野鳥観察の経験が無い方が手を上げてくれている。

人と関わりたい何かしたいという人たちが集まってきてくれている。谷津干潟を核にした人と人をつなげる場所となるよう運営に心がけている。



写真 15：売店とレストラン

・谷津干潟を核に地域の大人から子供、国内外のラムサール条約登録地が連携して、ここにしかないコミュニティを形成することで谷津干潟を中心とした地域を良くしていく。

### ③進むべき活動の方向性

・大切なのは、地元の自然が人を育てるということ。人が世代を残していくことは何よりも

大切。地域らしさ、自分らしさというものを大切にすれば地元の環境も大切にしなければならない。地元にとっての自然の大切さを認識し、地域らしさを引き継ぐために環境をどう残したらよいだろうかと、考えて欲しい。

・地域の自然が身近すぎて気づかない場合、国立公園、世界自然遺産など外の評価から見つめ直してみれば、今後の活動のヒントが隠されているかもしれない。

谷津干潟はラムサール条約登録地であったので、条約から活動を振り返ることにしている。条約を勉強することで大変役に立つことが多かった。例えばラムサール条約といえば鳥を守る条約であるように思われるが、それだけではない。人間の生活を助ける様々な環境サービスと結びついている。またラムサール条約の中で CEPA (Communication, Education and Public Awareness 広報・教育・普及啓発) といものがあるが、このことから地域と谷津干潟のかかわりを知ることの大切さ、谷津干潟の歴史を振り返るなど多くのヒントをもらっている。やんばる地域でも同じことが言えると思う。

・環境は環境保護団体や国が守るのではなく、活用する地域の人々が守るものだと考える環境に農業などの一次産業があるならば一番よいと思う。

世界自然遺産登録や国立公園化を目標とするのではなく、手段として捉え、10年後20年後、そしてずっと先の未来に、やんばるはどうすれば良いのかを、地域が考えることが大切である。



写真 16：ヒアリングの様子

### (3) ピッキオビジターセンター（プログラム視察）

訪問日時：訪問日時：平成 25 年 10 月 12 日（土） 13：00～18：30

先方対応：ピッキオビジターセンター

株式会社ピッキオワイルドライフリサーチセンター

広報 斎藤 あずさ

#### ①プログラム視察

「野鳥の森ネイチャーウォッチング」「空飛ぶムササビウォッチング」の 2 つのプログラムを体験した。ピッキオでは様々なプログラムがあるが、「野鳥の森ネイチャーウォッチング」と「空飛ぶムササビウォッチング」は常時行っているツアーである。

どちらのツアーも一般に解放されている公園や駐車場などありふれた場所でツアーを行う。

プログラム名	①野鳥の森ネイチャーウォッチング	②空飛ぶムササビウォッチング
開催期間	毎日	毎日
時間	10：00 出発 12：00 まで（毎日） 13：00 出発 15：30 まで （4月～11月のみ開催）	16：30～18：00 ※ムササビの出巢時間による
料金	大人 2,000 円 4歳～小学生 1,000 円 双眼鏡レンタル 1台 300 円	中学生～ 大人 3,200 円 小学生 2,500 円 幼児（4歳～6歳）無料
場所	軽井沢野鳥の森 （全行程 2 キロ）	星野温泉駐車場



写真 17：ピッキオビジターセンター

プログラム開催場所

①野鳥の森ネイチャーウォッチング



②空飛ぶムササビウォッチング

## ○野鳥の森ネイチャーウォッチング

「軽井沢野鳥の森」をインタープリター（ガイド）案内の下、森の生きものを観察した。

森にはクリヤカラマツが多く茂り、年間約 80 種の野鳥が観察できるほか、ニホンカモシカやツキノワグマなどの野生動物が生息している。



写真 18：参加者への配布物（双眼鏡レンタル）



写真 19：ガイドによる双眼鏡指導



写真 20：双眼鏡目標物

受付時の空き時間を利用して、ガイドによる双眼鏡使用方法の説明があった。近くの樹上に双眼鏡の目標物（バードカービング）も設置されており、初心者への配慮がなされていた。



写真 21：キバナアカギリの解説

視察を行った10月は野鳥の少ない季節ということではあったが、ガイドが観察路周囲の身近な生きものを紹介しながらガイドを行っていた。キバナアカギリが昆虫に花粉を付ける様子を、実際の花に虫のおもちゃを使ったのしくわかりやすく解説してくれたほか、ザトウムシやカエル、意外なキノコの美しさ、樹木に残された熊の爪痕などについて、専門用語を一切つかわずに誰にでもわかる言葉でそれぞれの特徴や生態を興味深くガイドしていた。



写真 22：ザトウムシを手に載せ、足の動きから名前の由来を解説



写真 23：マムシグサの性転換を解説

ピッキオのガイドの最大の特徴は、動植物の知識だけでなく、ガイドをするフィールドを十分に調査し、それを基にしたガイドが行われていることである。一例としてはマムシグサの性転換の解説では、フィールド内の102本のマムシグサを4年間にわたって観察しており、各株がどのように性変化してきたかを把握した上でガイドしている。基本的な情報は図鑑で渡しているため、ガイド内容は森の今の情報を伝えている。



写真 24： 転びやすい坂道。軽石が多いことを知らせ、噴火の話と、双眼鏡を顕微鏡にできることをレクチャー



写真 25： iPod による獣道の解説。夜間に撮影した映像を使い、昼間は見られない獣道を利用する生きものを見せている。

### ○空飛ぶムササビウォッチング

日没後、巣箱から出て飛び立つムササビを観察するツアーで、30分ほどの座学でムササビの説明を楽しく学んで期待感を持った参加者を、巣箱のある徒歩5分の距離にある駐車場までを移動させる。

ピッキオは12箇所の巣箱を設置してムササビの調査もしており、すべての巣箱をカメラで観察している。その為、確実にムササビのいる巣箱へ誘導することが出来、ムササビへのストレスのも少なくなっている。この日は今までの観察データに基づく説明どおり、予定していた時間にムササビが巣箱から頭を出し、巣箱の上に飛び乗ると、素早く木を駆け上がり参加者の頭上を通過し、遠くへ飛んでいった。



写真 26： 子供たちへのクイズ。ムササビは何の仲間？（トリ・タヌキ・リス・カモシカ・カエル）



写真 27： クイズ2。ムササビの大きさを手の幅で示させる。

### 3) ピッキオビジターセンター（ヒアリング）

訪問日時：訪問日時：平成 25 年 10 月 12 日（土） 13：00～18：30

先方対応：ピッキオビジターセンター

株式会社ピッキオワイルドライフリサーチセンター

広報 齋藤 あずさ

#### ①ピッキオの方針

「森本来の姿を経済的な価値として高く評価できれば、未来に森を残していける」というピッキオの理念がある。理念に基づき、エコツアーこと業、野生動物保護管理事業、講師派遣などのエコツーリズムサポート事業、環境教育事業などを展開している。

中でも、エコツアーは自然調査で身につけた知識を分かりやすくガイドすることで、多くの方に自然を知ってもらい、自然環境を守っていくということを大切にしている。

#### ②フィールドとガイド方法について

・一般には特徴のない普通の森。だからこそ、森の魅力をガイドが引き出すことができる。フィールドをモニタリングし、よく知ることで、森の最新情報と今までの歴史をお客様に伝えられるようにしている。

・ガイドの内容はガイド間で確認しあっているが、現場ではガイドに任される部分が多い。小学生にも理解してもらえるガイドを目指している。

#### ③ピッキオの育成体制

・ピッキオに採用されると一年間の試用期間がある。その時に座学・実習による育成システムを受ける。内容は、生態学・分類学・フィールドの生きもの知識・接客技能。現在試社員は調査員も含め 15 名で運営している。

・ピッキオに入社する方は環境コンサルタント会社や理科教諭、環境省などからの転職者が主で、生物に詳しい人が多い。生物の知識はもちろんだが、お客様を相手にする仕ことなので接客技能を大切にしている。接客はホテルの接客をベースに学ぶようになっている。



写真 28：ヒアリングの様子



### 3-3 ワークショップ型講演会報告書



平成 26 年 2 月

写真 1 : 屋古集落

## 1. ワークショップ型講演会概要

- 1) 期日 平成 25 年 12 月 14 日 (土)
- 2) 実施場所 大宜味村屋古区
- 3) 講師 日本野鳥の会十勝支部 支部長 室瀬秋宏 氏  
置戸町観光協会 事務局長 坂田英明 氏
- 4) 参加対象者 大宜味村役場関係者、黄金人委員、地域住民
- 5) 方法 参加者の意見交換を最大限に活かすため、20 名程度の少人数による交流会形式でワークショップを行う。交流会中に講演を組み入れ、先進地事例を参考にした大宜味村におけるエコツーリズム人材育成の具体的な在り方を検討する。



写真 2：屋古チョウ観察ツアーの様子 1



写真 3：屋古チョウ観察ツアーの様子 2

## 2. 目的

平成25年度大宜味村エコツーリズム人材育成計画を策定する為、エコツーリズムの課題、地域資源の発掘・活用方法を明らかにし、地域住民へエコツーリズムへの理解を広めることを目的としたワークショップ型講演会を実施した。

このワークショップは、実際にエコツーリズムガイド人材育成の拠点としてモデル地域となる屋古区で実施し、地域における課題を明確化し、基本計画策定に反映させる。

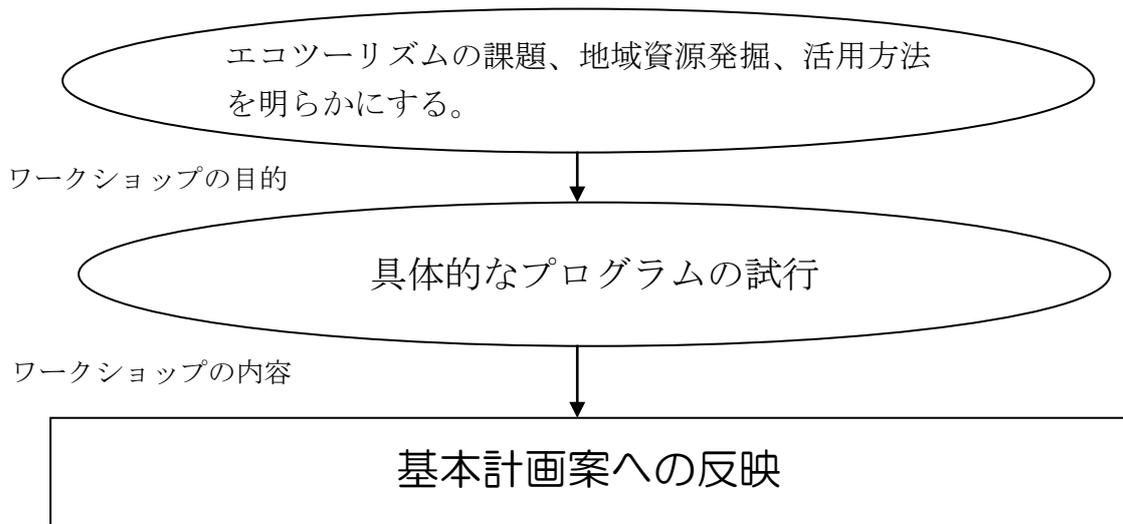


図1：ワークショップの開催地

### 3. 内容と進め方

#### 1) 内容

エコツアーリズムプログラム作成や観光マーケティングに関する専門家室瀬秋宏氏および坂田秀明氏を講師として依頼し、屋古区におけるエコツアーリズムプログラム作成の検討、試行を行った。また、地域住民を対象にエコツアーリズムへの主体的参加を考えるための、講演会・意見交換会を開催した。

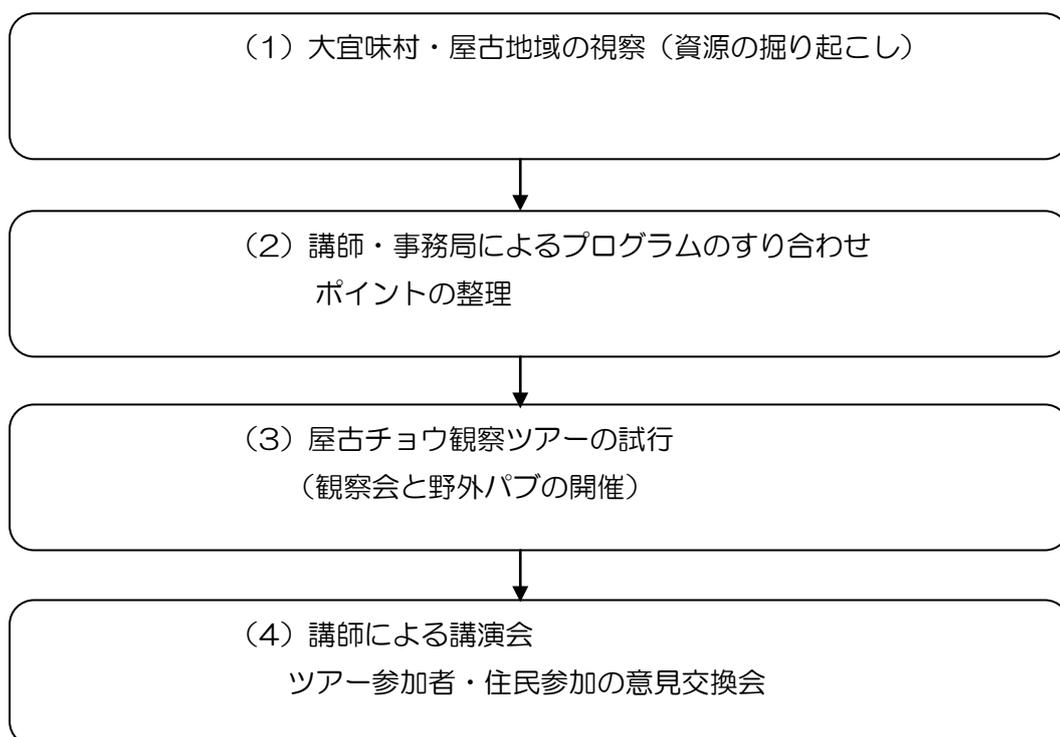


写真 4：講演会の様子



写真 5：屋古チョウ観察ツアーの様子 3

## 2) スケジュール

目的	時間	内容
①大宜味村内の観光資源視察	8 : 30～12 : 00	<p>講師による村内の観光資源視察</p> <p>平南川（ター滝） ↓ 六田原展望台 ↓ 大保ダム周辺 ↓ 笑味の店</p>
②屋古チョウ観察ツアーの試行	13 : 00～14 : 00	講師が屋古集落を下見し、プログラム試行を目的とした集落の観光資源の選定を行なった。
	14 : 00～16 : 30	<p>プログラムの試行を実施した。</p> <p>チョウ観察を中心とした屋古集落の自然文化ティータイム付きツアー</p> <p>※野外パブメニュー ・アカバナ茶（シークワサー）・国頭紅茶・からき茶・コーヒー・サーターアンダギー・ヨモギモチなど ・オリオンビール（中瓶）&amp;おつまみ（ラッキョウの塩漬け・パン・チーズ）</p>
③講師による講演会・意見交換会	19 : 00～21 : 30	<p>地域住民を対象にエコツーリズムへの理解と参加を促す為の、講演会・意見交換会を開催した。</p> <p>①講演会 1 講師 室瀬秋宏 「大宜味村のエコツアー実現にむけて」</p> <p>②講演会 2 講師 坂田英明 「地域資源の活用について」</p> <p>③意見交換会</p>

## 4. 結果報告

### 1) 大宜味村内の観光資源視察の結果

実際に現在観光地として注目されている地域を視察し、人材育成基本計画策定に向け、エコツーリズムの可能性について整理した。

■開催日時：平成 25 年 12 月 14 日（土） 9：00～12：00

■開催場所：大宜味村内（平南川（ター滝）～六田原展望台～大保ダム周辺～笑味の店）

■参加者：室瀬秋宏・坂田英明（講師）、増田耕平・宮城良治・市田豊子（事務局）

計 5 名

#### (1) 平南川（ター滝）

項目	内容
①観光資源の概要	大宜味村でも、急速に注目されつつある観光地。年間 5 万人の人々が滝を求めて集まる。
②活用の方法についての提案（拠点として）	<p>・ガイドスキルトレーニング場所としての活用について</p> <p>ター滝は、川登りが中心でトレッキング的な要素が多く、ガイドが居なくてもそれなりに楽しめる場所である。そのことから、大宜味の目指す文化や自然を伝えていくガイドスキルのトレーニング場所としては、適地とは言い難い。</p> <p>・地域活性化の拠点としての活用について</p> <p>大宜味村エコツーリズムの視点から見ると、地域活性化の重要な拠点として活用できる。ター滝は多くの人々が訪れる場所でありながら地域の活性化に繋がっていないのは残念なことである。むしろゴミや排泄物、駐車、利用者の怪我や避難の対応などが地域問題となってしまう。これらを解消し、活性化に繋げるための拠点づくりが必要になると考える。具体的には、津波地区と共同で売店など拠点を作り、訪れる人々に適切なター滝の利用方法を伝えるとともに、ゴミ掃除、トイレの設置、地域特産品を販売したり、環境協力金を募るなどして地域とター滝利用者の関係を調整するとよい。</p> <p>このような具体的な問題解決と地域活性化の活動を通して、観光と地域活性化をむすび付ける大宜味村エコツーリズムの担い手が育成されるものと期待される。</p>

## (2) 六田原展望台

項目	内容
①観光資源の概要	塩屋湾の北側に位置する展望台。展望台に登る道路の両側には桜が植えられているほか、展望台から塩屋湾、東シナ海を一望できる。また、六田原～イギミハキンジョウ散策道の入口もある。
②活用の方法についての提案（拠点として）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムを行う場所としての活用について 風景の素晴らしさ、すぐ近くに散策道や洞窟があるなど、大変に魅力的な場所である。将来的に多彩なプログラム作りを行う上で重要な拠点となる。</li> <li>・地域活性化の拠点としての活用について 宿泊所、ホテルが置かれる拠点としては村内でも第一級品の場所であると考え。しかし、魅力的な場所でありながら、那覇などの中心地から遠いことが問題である。この問題を解消するためには、広告などで宣伝することはもとより、送迎付きのツアーを組むことが大切である。</li> </ul>

## (3) 大保ダム周辺

項目	内容
①観光資源の概要	生態系に配慮して建設された大保ダム、野生生物が棲む森に囲まれている。複雑に入り組んだダム湖面が、多くの橋によって繋がれており、景観的魅力の高い場所である。
②活用の方法についての提案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムを行う場所としての活用について 橋を渡りながらやんばるの森を観察できる環境が素晴らしい。フットパスやノルディックウォーキングに最適な場所であると考え。将来的に多彩なプログラム作りを行う上で重要な拠点となる。と考える。</li> </ul>

## (4) 笑味の店

項目	内容
①観光資源の概要	長寿の村大宜味村を代表する店。「長寿膳」をはじめ、島野菜など地域の食材を中心とした、昔から食べられている料理を味わえる場所として、県内外からも多くの観光客が訪れる。
②活用の方法についての提案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムを行う場所としての活用について 料理の内容が大変に素晴らしい。地域の食材を活かした料理のどれもが魅力的。県内だけでなく全国レベルの料理の内容である。ツアープログラムの食事には笑味の店のお菓子などを組み合わせるとよい。</li> </ul>

視察風景



写真 6：平南川（ター滝） 1



写真 7：平南川（ター滝） 2



写真 8：六田原展望台 1



写真 9：六田原展望台 2



写真 10：大保ダム周辺 1



写真 11：大保ダム周辺 2



写真 12：笑味の店 1



写真 13：笑味の店 2

## 2) 屋古チョウ観察ツアーの結果

基本計画策定の一環として、屋古の資源を活用したツアープログラム開発を進めるため、屋古集落においてモデル的ツアープログラムを試行した。

ツアープログラムの内容は、今後、ガイドリーダーの拠点となる屋古集落内のシークワサー農家を含む地域住民に協力して頂き、屋古集落の特徴であるウンガミなどの歴史的要素とチョウを中心とした自然を通して屋古の魅力を伝えるものとした。

ツアープログラムを通して屋古の素晴らしさを知り、屋古の人々の暮らしや、自然を感じられる「屋古チョウ観察ツアー」の開発を目指した。

■開催日時：平成 25 年 12 月 14 日（土） 14：00～16：30

■開催場所：屋古集落

■参加者：室瀬秋宏・坂田英明（講師）、山城春江・山川均（黄金人委員）山城均・藤田元也（大宜味村役場企画観光課）増田耕平・宮城良治・市田豊子（事務局）、他地域住民 計 13 名

### （1）計画・試行の流れ

#### ①資源調査

事前に事務局が中心となり、屋古集落住民の協力のもと、集落資源の発掘を行なった。具体的には、現地を住民と共に踏査し、地域住民との話し合いで得られた内容を事務局が取りまとめ、屋古の資源マップを作成した。

#### ②ツアープログラムの整理

屋古の資源マップを基に、講師とともにツアープログラム内容を整理した。具体的には事務局のツアープログラム案を講師とともに現地踏査し、案内する内容を再検討した。

#### ③ツアープログラムの実施

屋古バス停よりスタートし、屋古集落内の文化財や自然を中心に解説。ツアーのゴールに野外バブを用意して、くつろぎながら屋古の里山的環境を楽しんだ。

野外バブのメニューはヤンバルでなければ味わえないものを意識し、メニューを組んだ。

#### ④感想

モデルツアー実施後の参加者から出された意見を踏まえ、成果と今後の課題として整理した。

## (2) ツアープログラム試行結果

### ① ツアー参加者

参加者・・・室瀬秋宏・坂田英明（講師）、山城春江・山川均（黄金人委員）他地域住民 山城均・藤田元也（大宜味村役場企画観光課）計 10 名

### ② ツアー同行者

案内・・・宮城良治・市田豊子（事務局）

記録・・・増田耕平（事務局）

### ③ 案内内容

時刻	場所	説明内容
14:06	屋古バス亭	はじまりの挨拶 塩屋湾・ウンガミの話
14:16		出発
14:18	屋古団地前	アッタイグラーの話 苗字の話（宮城性は70戸もある。ほとんど宮城）
14:26	二股エリア	アブシバレーの話 （アフリカマイマイを集めて海に流した）
14:32	マンカー	集落内の水場の話 （ほとんどの水場がかれている。なぜだろう）
14:39	アサギ	・ウンガミの儀式の話（ヨンコイやクムを編む話） ・ハーリー船の話 （台風でも中止しない・舵取りの難しさの話、ちょっと間違えるとゴール前で蛇行してしまう。） ・サガリバナの話、チョウの話
14:55	ハーリー神	・庭木の話（シマバナナ・パパイヤの話） ・ハブの話（ハブの通り道の話）
15:06	集落内	・キチョウの話（メスが羽化するのをオスが待ち構えている話）
15:26	シークワサー畑	・屋古集落の段畑の風景の話 ・シークワサー畑にあつまる生きものの話
15:40	シークワサー畑	・野外パブ アカバナ茶（シークワサー）・国頭紅茶・からき茶・ コーヒー・オリオンビール（中瓶）&おつまみ（ラッキョの塩漬け・パン・チーズ）・サーターアンダギー・ヨモギモチ

#### ④感想

ツアー参加者の主な回答は、次の通りであった。

##### ガイド内容について

- ・キチョウのオスがメスを待つ解説がよかった。
- ・集落の暮らしの話をもっと入れたらよいのではないか。
- ・さらに地域に生きる生きものをよく調べてツアーに取り入れて行けばよいと思う。
- ・スマートホンを取り入れた解説は効果的だが、もう少し使う場所や見せ方の工夫が必要。
- ・いきなり動植物の固有名詞や見たことのない文化の話をされてもむずかしい。まず、文化財や自然に興味をもってもらう解説が必要で、そのあとに固有名詞を教えてあげるとよい。
- ・地域の民話を取り入れるとよい。地域には様々な民話が残されていてガイドにはとても役立つとおもう。

##### 野外パブについて

- ・少しの工夫で贅沢な雰囲気を楽しめた。今後ツアーを通じて大宜味の特産品を紹介していけるようになれば楽しいと思う。
- ・実際に何か調理してみたら、もっと面白いと思う。
- ・アカバナ茶がとても綺麗で良い。目の前で採れたシークワサーを入れるという工夫も良い。さらに無農薬で作られていることもポイントだと思う。野外パブを通じて屋古の魅力がさらに伝わってきた。
- ・カラキ（ニッケイ）茶やクサモチなど地域のものが美味しかった。
- ・野外パブのようにじっとしていると、多くの生きものが現れてくる。これを解説するようにしてもよいのでは。

##### 今後のツアーについて

- ・ツアープログラムを整理し、旅行代理店を通じて実際にツアーを行ってみるとよい。

集落と話し合いながら、地域の為のエコツーリズムを作っていくとよい。

---

### 感想全記録

・集落の暮らしの話をもっといれたらよいのではないか。よく沖縄では庭木にタンスや三線の木を植えるというが、実際は屋敷の木は戦争の弾が入っている可能性から製材出来ない話、子どもの頃シークワサーの実をとった話や、遊びで食べたツルソバの実の話など、暮らしの見える話をもっとあるといいと思った。

・キチョウのオスがメスを待つ解説はよかった。季節ごとの生きものをよく調べてその特徴を楽しく伝えられるように、さらに努めて欲しい。

・12月はチョウが少ない。この季節に渡ってくるサシバ、綺麗な声でなくアカヒゲ、また今回はシロハラがよく見られた。地域に生きる生きものをよく調べてツアーに取り入れて行けばよいと思う。

・スマートホンを取り入れた解説は効果的だが、もう少し使う場所や見せ方を研究してみるほうがいい。言葉や解説を中心にして、興味をもってもらい、ここぞという時に動画などを使うとさらに効果があると思う。

・自然や文化に言えることだが、いきなり固有名詞を言われて解説されてもわからない。文化財や野鳥などはマニアでなければ、「ウンガミ」や「サシバ」、「シロハラ」と言われてもわからないし、興味の無いものを解説されても喜ぶことが出来ない。まず、文化財や自然に興味をもってもらい解説が必要で、そのあとに固有名詞を教えてあげるとよい。キチョウの話はその意味でもよかった。

・野外パブだが、少しの工夫で贅沢な雰囲気を楽しめた。飲み物や食べ物をそうだが、器や敷物が大宜味村で作られたというのも楽しい。今後ツアーを通じて大宜味の特産品を紹介していけるようになれば楽しいと思う。そのような連携も考えてほしい。

・集落や自然の解説だが、地域の民話を取り入れるとよい。地域には様々な民話があるのでガイドにはとても役立つと思う。今後取り組んでほしい。

・野外パブで実際に何か調理してみたら、もっと面白いと思う。ハイケイなど焼いたらどうだろうか。

・野外パブを利用してフリータイムを多めに作り、聞きたい人にはいろいろ教えてあげることを考えてみれば。

・野外パブのようにじっとしていると、多くの生きものが現れてくる。これを解説するようにしてもよいのでは。

・アカバナ茶がとても綺麗で良い。目の前で採れたシークワサーを入れるという工夫も良い。さらに無農薬で作られていることもポイントだと思う。野外パブを通じて屋古の魅力がさらに伝わってきた。

・ゆっくりしたツアーでとても良い。カラキ茶やクサモチなどやんばるらしいものが、とてもよいと思った。

・シークワサー畑は12月でも蚊が多い。対策が必要。

・ツアープログラムを整理し、旅行代理店を通じて実際にツアーを行ってみるとよい。楽しいものが見れて美味しいものが食べれて、サービスに見合った料金であれば必ず人は来る。その中で集落と話し合いながら地域の為のエコツーリズムを作っていくとよい。

以上

## 屋古入口



写真 14：塩屋湾の風景



写真 15：集落西側のイタジイ

①集落前の塩屋湾は沖縄八景に選ばれている。

・イタジイの木が生えているが、集落の近くにあって伐られずに残っているのは珍しい。地域の子どもの遊び場だった。

・屋古は塩屋、田港、押川、大保、江洲、白浜など塩屋湾を取り巻く 7 集落と共に「塩屋湾のウンガミ」（沖縄県北部に分布するウンガミを代表する行事・国指定重要無形民族文化財）を共有している。

塩屋湾のウンガミでは、田港から始まり、次に屋古を拝み、塩屋へと移動する。祭場となる屋古の神アサギは、アサギ広場の中心に太い柱を立て、その柱を中心に、クムー（藁で編んだ日よけ）を張り、さらに周辺には、芭蕉の葉で作られた屋根が張り巡らされ、地面には芭蕉の葉が敷き詰められる。ウンガミでもっとも注目される勇壮なハーリー競漕は、屋古集落に各集落からのハーリーが集まり、神人を乗せ一斉にスタートし塩屋を目指す。このように屋古は、今現在も沖縄固有の文化が息づく場所である。

・塩屋湾の海神祭は平成 9 年 1 2 月 1 5 日に国の重要文化財に指定されている。毎年、お盆後の最初の亥の日に必ず行われる。天気が悪くても変更されることはない。台風でも行われる。400年～500年続いてきた祭りで、田港で神事後、籠に乗って神人が屋古の神聖な場所「アサギ」で神事を行う。

## 屋古入口～二股地点



写真 16：アッタイグラーの風景



写真 17：④アブシバレーが行われる場所の風景

②団地（村営住宅）は、かつては沼地でその後キビ畑になった。

③各家庭では昔ながらの裏庭などで自家消費用に野菜を作るアッタイグラーが営まれている。地域の人々は自分の土地で育った野菜を食べて暮らしてきた。

④集落の大切な神聖な場所。アブシバレーが行われる。大きなデイゴの木が2本あったが、枯れてなくなった。

## 万川（マンカー）



写真 18：マンカーの風景

⑤かつては溢れるほどは水が湧いていた。神人が水を飲んだ井戸。大宜味村の集落内の水場は現在枯れてしまっているところが多い。

## アサギ



写真 19：神アサギ



写真 20：アサギマとハーリー小屋

### ⑥アサギ

- ・神が宿る神聖な場所。神人の休みどころ。必ず礼拝をして入るように。
- ・ヌル（ノロ）は海の方を向いて座る。
- ・広場の中央に柱を立て、藁で編んでクムを作る。クムは塩屋が作る。塩屋の集落の中で、作る担当の字（塩屋・大川・兼久）が決まっています、交代で行う。現在は作り手が若者に移り段々と技術が失われていくため、クムの大きさにも違いがある等の年によって差が出るなど伝承するための後継者問題もある。
- ・ウングミの際には神人が「ヨンコイ、ヨンコイ」と言いながら、矢を射るようなしぐさで柱の周りを右7回、左7回まわる。「シマンホー」2人が石を置きながら、回る回数を数える。五穀豊穡を祈る。
- ・祭りの時には、いろいろな荷物を運ぶのに、サバニで運んでいた。それが、どちらが早く運ぶか競争になってハーリー船になった。那覇や糸満のハーリーは中国からのものだが、それとは起源が違う。競争するなら那覇のハーリー船のようなものにしようと形をまねて、遊び部分が導入された。
- ・小さい船のフギバンは若手が漕ぎ、大きい船のウフバーリーは中年が漕ぐ。以前、ウフバーリーは48人で漕いだが、今は35人で漕ぐ。体格が良くなったのでたくさん乗れなくなった。
- ・最近になって塩屋、屋古、田港で2艘ずつハーリー船を新造する際に、屋古の大きなハーリー船を見本にしている。屋古のハーリー船を解体して、同寸法で同じように造ったが、乗ってみると、以前の船の方が出来が良い。
- ・200年前から開始、初めはくり船からサバニが普及して交通手段になり、ハーリーになった。
- ・船の脇に書いてある赤いマークは「火の玉」とも言われているが、白は「波」で赤は「タコ」にも見える。
- ・歴史を重ねるうちに様々なことがあり、奉納角力で源河の人が仕掛けて塩屋と根路銘の人が大喧嘩になり、それ以来、根路銘は海神祭から外れていると言われている。

## アサギ周辺



写真 21：サガリバナ



写真 22：ウフヤの風景

### ⑦サガリバナ

- ・昔はもっと大きな木だった。朝は、落ちた花がまだしおれてないので、首飾りにして遊んだ。
- ・隣の家は「ウフヤ」で、100年以上前の豪農。当時、コンクリートの建物でこれだけ大きな家畜小屋はめずらしい。

## ハーリーガミ周辺



写真 23：ハーリーガミ



写真 24：ハーリーガミ周辺の風景

### ⑧ハーリーガミ

- ・ハーリーの乗り手の代表者3名が出発前の安全祈願と、ハーリー終了後の無事に戻ったお礼にお祈りする場所。
- ・周囲にはクワズイモ、フウリンブッソウゲ、シマバナナなどがある。アフリカハウセンカには沢山のチョウが集まっている。この小道は、ウンガミの際に神人が通る道でもある。

## ウフヌハー周辺



写真 25：ウフヌハー



写真 26：ウフヌハー周辺のシークワサー畑

### ⑨ウフヌハー

- ・昔は水が湧いていた。ここより上の水は飲み水、下のものは生活用水に使った。テイチ（オキナワシャリンバイ）の木が生えていたが枯れた。ヤギが落ちてみんなで助けたことがある。
- ・周辺の風景はシークワサー畑が広がる。周りの山にもシークワサーの段々畑を見ることができる。
- ・シークワサーを求めてチョウが来るほか、多くの野鳥の鳴き声を聞くことができるポイント。冬は両側の山からサシバが飛ぶ姿、それを追い掛け回すカラスの姿なども観察できる。

## 神人が身を清める場所周辺



写真 27：身を清める場所

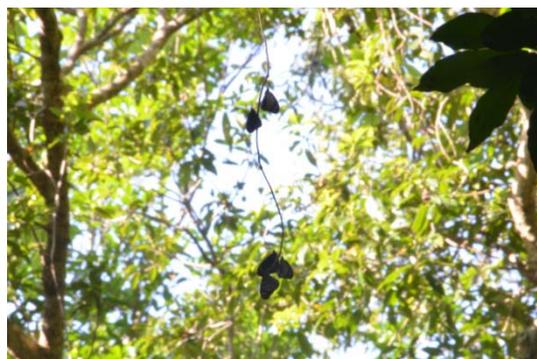


写真 28：リュウキュウアサギマダラの越冬

### ⑩ヌルが身を清める場所

- ・神人が禊をするところ。今は簡略化している。しばらく枯れていたが12年ほど前から水が戻った。
- ・奥は水源地となっていて、現在は農業用水として使われている。冬になるとリュウキュウアサギマダラが越冬している姿を観察することができる。コノハチョウの食草のオキナワスズムシソウ生育している。アカヒゲや各種のカエルの声も賑やかな場所である。

## モクズガニのポイント



写真 29：モクズガニのポイント



写真 30：ツマベニチョウ

### ⑪モクズガニのポイント

・ここではモクズガニが沢山とれる。地域ではよく食べていた。モクズガニの他、テナガエビが見られるほか、ヘビなどもある。この地点はベニツツバナが多いため、特にツマベニチョウが多く見られる場所となっている。この川はチョウの通り道（蝶道）となっていて様々なチョウが川にそって飛んでいく姿を観察できる。

## 集落の発電所



写真 31：集落の発電所跡 1



写真 32：アッタイグラー

### ⑫集落の発電機

・昔（40年前）、発電機があった場所。夕方になると動かして、電気を集落に送った。発電機が動かないときは、暗闇だった。発電機が使われていた期間は長くはなかった。それまではランプの生活だった。

現在は、アゲハチョウが多く集まる場所となっている。冬はリュウキュウアサギマダラがよく見られる。

### ⑬アッタイグラー

・自給自足、裏庭の畑。綺麗な畑でアオタテハモドキやモンシロチョウ、イシガケチョウが多く見られる場所。向かいの家の庭には在来のハウセンカ（ティンサグの花）が植えられている。

## サンゴ石灰岩の塀のある家



写真 33：サンゴ石灰岩の塀のある家

### ⑬ひんぷんの話

- ・ 男性はひんぷんの右を歩いて家に入り、女性は左を歩いて入る。
- ・ 沖縄では昔、主人と長男は一番座で食事をし、女性は土間で食事をした。
- ・ お盆の頃にヤコウボク（夜来香）という良い香りの花が咲く。

## ハーミヌマー（リュウグウシン）周辺



写真 34：リュウグウシン

### ⑭リュウグウシンの話

- ・ ハーリー船の漕ぎ手は、神人がアサギで神事を行っている間、公民館に集合して神事の終了を待つ。その後、全員が中道を通ってリュウグウシンの前に来た時、鉢巻を外して安全祈願をする。戦争で出兵するときや、長く屋古を離れる時にはお参りする場所でもある。
- ・ ナハ道（中道）は人が亡くなった時、棺を担いでこの道を湾まで行き、棺を降ろして集

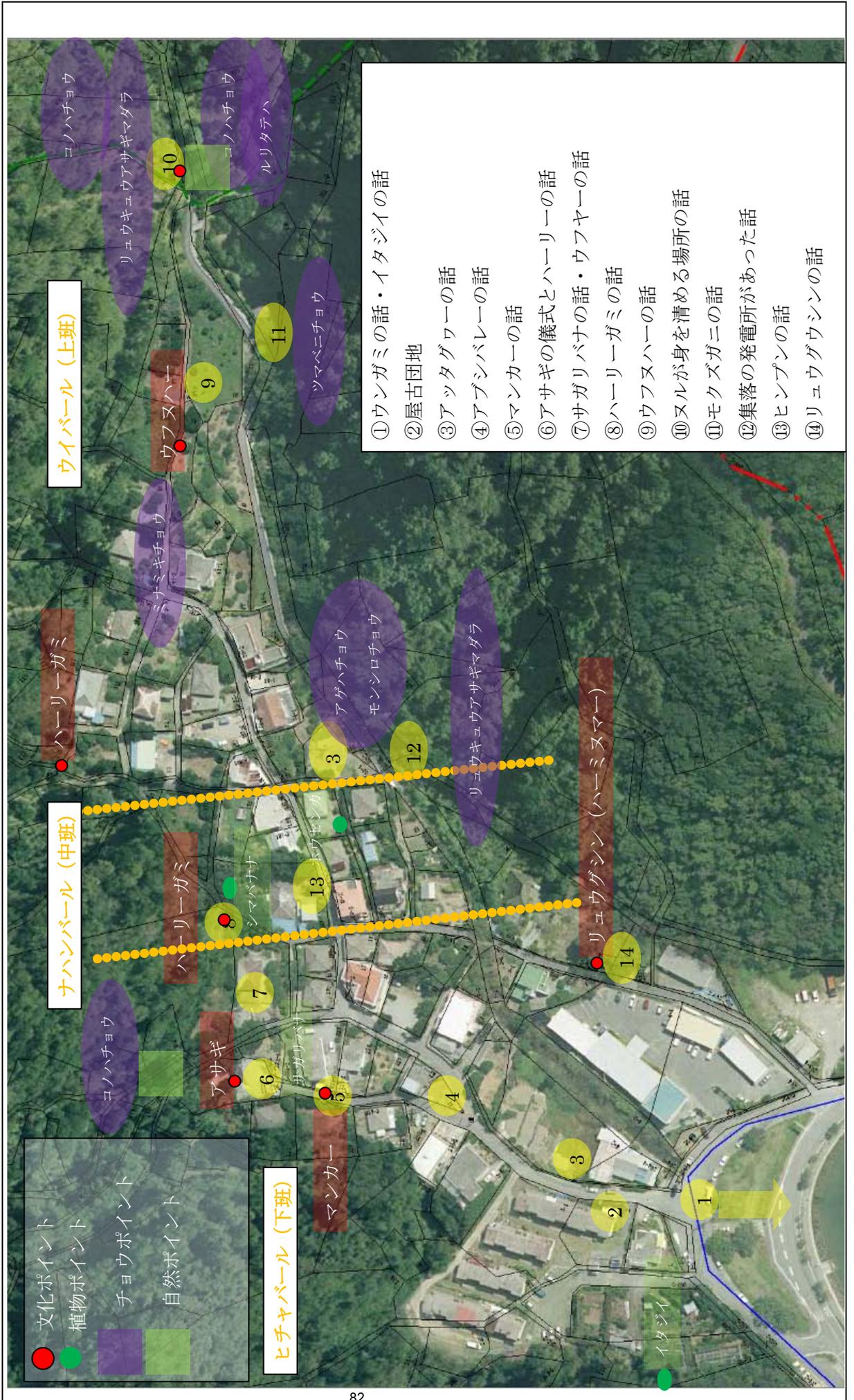
落にお別れをして火葬場に向かう。団地の人の場合、この道を通ることは許されない。

- ・屋古の中心を流れる川は、東側の山すそを流れて塩屋湾に注いでいたが、1958年のシャーロット台風で被害を受け、38人が死亡し、山も大きく崩れた。川の流れは西側に大きく蛇行して、今の流れになった。

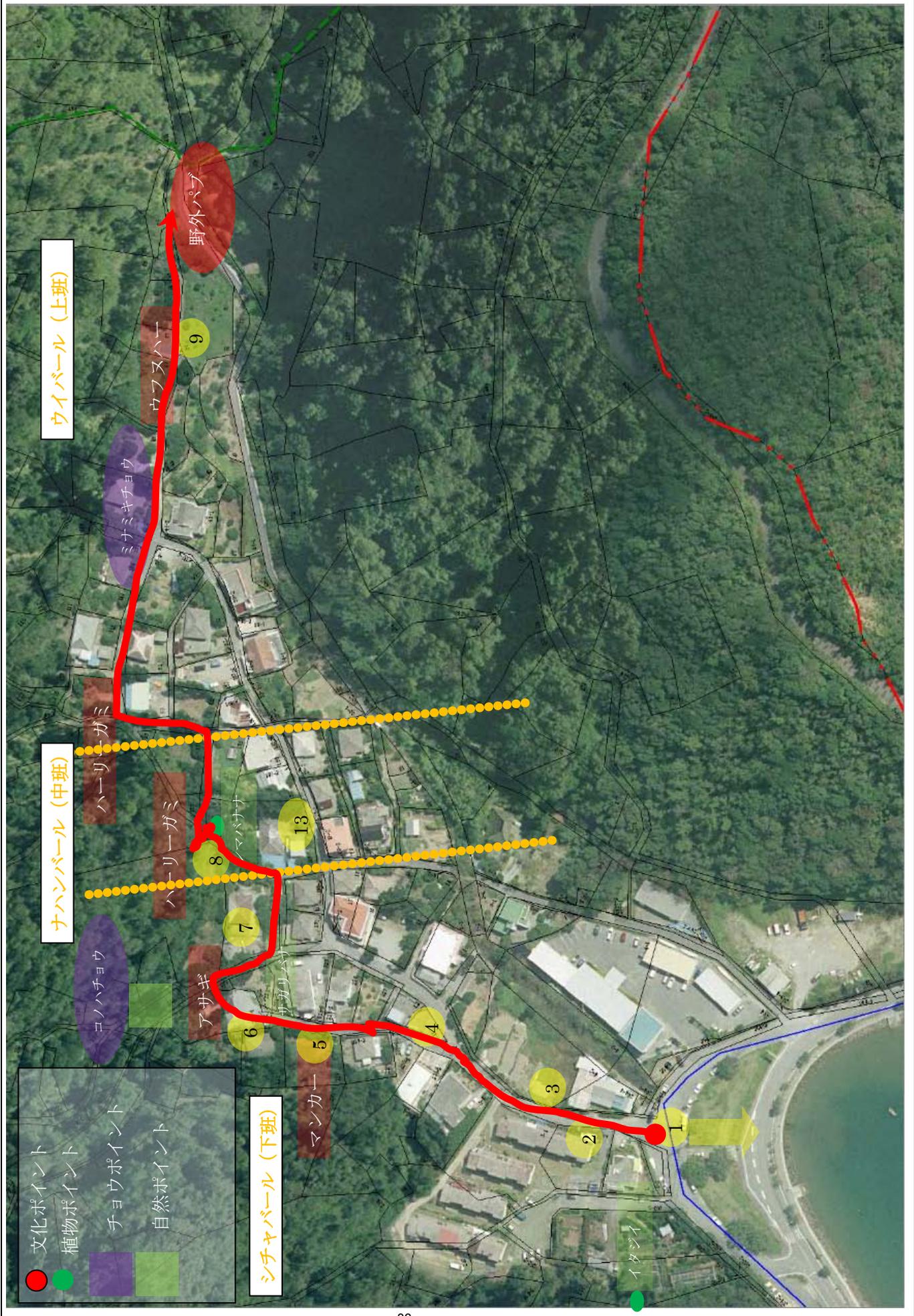
- ・対岸のメーレー墓は（目洗い墓）。戦の際に兵士が傷を拭ったことからその名がついた。

資料2 屋古の資源マップ

# 屋古集落の資源マップ



# ツアープログラムの内容・順路



資料3 野外パブメニュー

野外パブメニューについて

今回のパブメニューは「やんばるのお茶会」をイメージしている。使用するものは、大宜味村、国頭村、東村を中心にしており、特に茶器と敷物、食事は大宜味村から活用している。このパブメニューを通して、地域にさらに興味をもってもらうことが目的である。

飲み物	ハイビスカスティー	屋古区のハイビスカスと、シークワサーを使用している。シークワサーは無農薬で栽培されているものを利用した。
	国頭紅茶	国頭道の駅より購入
	からき（ニッケイ）茶	国頭道の駅より購入
	オリオンビール	市販のビールを利用
	コーヒー	市販のコーヒーを利用
食べ物	タピオカアングギー	塩屋区のお年寄りが手作りしたものを使用した。原料のタピオカはアツタイグラーで自家栽培したものである。
	ヨモギモチ	塩屋区のお年寄りが手作りしたものを使用した。原料のヨモギはアツタイグラーで自家栽培したものである。
	島ラッキョウの塩漬け	大宜味産の島ラッキョウを使用した。
食器	陶器カップ・ソーサー	大宜味村の作家の作品を使用した。
	グラス	市販のグラスを利用
	取り皿	大宜味村の陶芸作家の作品を使用した。
	箸	市販の箸を試用
	テーブルクロス・コースター	大宜味村の藍染作家の作品を使用した。



写真 35：野外パブの様子



写真 36：ハイビスカスティー

### 3) 講演会・意見交換会の結果

■開催日時：平成 25 年 12 月 14 日（土） 19:00～21:30

■開催場所：屋古区公民館

■参加者：25名

## プログラム

開会

### ①講演会

#### 1. 「大宜味村のエコツアー実現に向けて」

講師/室瀬秋宏 氏（日本野鳥の会 十勝支部 支部長）

#### 2. 「地域資源を活かした観光戦略」

講師/坂田 秀明 氏（置戸町観光協会 事務局長）

### ②意見交換会・懇親会

閉会

## (1) 講演内容

### ①「大宜味村のエコツアー実現に向けて」

講師/室瀬秋宏 氏 (日本野鳥の会 十勝支部 支部長)

・エコツアーとはエコに気をつけるツアーでも、生き物を観察するツアーでもない。エコツーリズムとは「①地域資源の持続的な活用」「②訪問者が飲食や購入などを通しての地域活性化」「③訪問者が適切な案内を受けて地域資源とのふれあい」である。そのために優秀なガイドの確保、育成が必要になる。では大宜味では何をするか、だれがするのか？

・自然、食・人を軸に「おもてなし」を考える。

また行きたい(屋古集落) 愛する人に食べさせたい(笑味の店) またあの人と会いたい(地域ガイド) となるようなツアーを考える。

人数は15人以内で考える。訪問者の満足度、反応が見える人数であり、対応が行き届く最大人数である。

訪問者の対応は多くても一人でも一緒。一人のお客さんを満足させることから、その後大きく何倍にも波及していく。

ツアーを行うにあたっては主催者の趣味を押し付けすぎず、客観的な目を持つこと。

・人数が少なくても誠心誠意おもてなしをすることが大切。良い評判が大きく広がっていくことになる。愚安亭遊佐という一人芝居役者をしている方の話をここに紹介する。

「唯、一人の為に」

幾百人がいても、その幾百人の唯一のために。

昔3人のお客さんの前で話した。

明るる年、同じ地から声がかかり出かけたなら5百人のお客さん。

お客さんに教えてもらった。

・日本野鳥の会十勝支部スタイルのエコツアーは、「自然」「人」「食(ご馳走・北海道産)」「器(北海道産)」を非日常的空間で楽しめるように考えている。

・大宜味村屋古でツアーを考える時も「自然」「人」「食(ご馳走・沖縄産)」「器(沖縄産)」を非日常的空間で楽しめるように工夫してみるとよい。

・一番大切なことは、地域活性化を行う主体となる「ガイドリーダー」が自らエコツアーの具体的な販路づくりに着手すること。ツアーが成功すれば屋古地域全体の地域活性化に着実に広がっていく。

## ②「地域資源を活かした観光戦略」

講師/坂田 秀明 氏 (置戸町観光協会 事務局長)

・「日本の観光地三大がっかり」をご存知ですか？答えは、沖縄の守礼の門、札幌時計台、高知のはりまや橋。ではなぜ、「がっかり」なのにならいつまでも人が来るのか。それは歴史と伝統の重みがあるから。急造された観光地とは違う。

・観光で大切なのは、まず考え方。いかにお金を落としてもらうことを考えられるか。そして素材だが、良いものには必ず人がくる。そのためには、知らせるきっかけは必要であり、人を受け入れる仕組みは作る必要があるし、食事も必要。

しかし、それらは心のない急造品ではダメ。良いどうかはお客さんが決める。無理やり特産品を作ってもまず上手くゆかない。時代が変わっても、地域で長く愛されているものを上手く使う必要がある。それが地域資源の活用である。

・ではやんばるの場合はどのような観光が考えられるか。まず、すでに来ている人の流れをどう活性化に結びつけるかを考えるべきである。大切なのは、物事の捉え方だと思う。

例としては北海道美瑛町。写真家が農村の美しい風景を取り上げたことがきっかけで、セブンスターやアップル社のCMに使われたことから、年間120万人もの人々が来るようになった。しかも現在もその人数は増え続け130万人を越えようとしている。しかし地域は農業が主体であり、来訪者はどちらかというと迷惑。来訪者はゴミを落とすし、トイレの苦情がある、さらに農地に入ってしまう人までいる。これに対処する受身な対応となっている。案内板、駐車場、トイレの整備などが進みつつあるが、観光の受け入れ体制が育っていない。通過型でお金になりにくいと捉えている。

隣の富良野市もドラマ「北の国から」で知られる有名な景観の美しいところ。ここは美瑛町とは逆でお金を落としてもらう仕組みを工夫し、次第にホテル作りや体験メニューを用意していった。どちらも多くの人々が訪れる、素晴らしい地域資源をもっている地域の話である。観光地とは考え方次第。地域資源を活かすことが出来れば、次第に作り上げられていく。

・知らせることで大切なのは、特殊なものをゼロから作り上げるのではなく、地域の素材を面白くディフォルメして、具体的にアピール出来るということである。

・人を受け入れる仕組みづくりで大切なのは、もう一度行きたいと思わせること。例としてはちびっこ船長という企画をしたことがある。子どもたちは大人になって思い出の場所として自分の家族を連れてまた来てくれる。さらにちびっこ船長同窓会を開いて、歴代の船長を無料で招待したこともある。このような長期的な仕掛け、演出が大切。

・食事も、新商品開発で上手くいくものはほとんど無い。コンサルが仕掛けて短期的にもり上がるが、その後立ち消えてしまう。それよりは地域でみんなが美味しいと思って永く食べられ続けているものを使うのが良い。結局はそういったものが残っている。

・とにかく待っているのではなく、知ってもらうために、お客さんをどんどん連れてくること。その中で何が必要とされるか見えてくるし、手法も磨かれていく。

まずは、沖縄に来ている観光客を大宜味に呼ぶという仕組みを考えていくとよい。具体的には、近郊のエリアと共同して観光を進めるとよい。ホテルなどに滞在している観光客を大宜味村に呼ぶなど。

・人生には大きなチャンスがどんな人にも3回はあるという。しかしほとんどの人がチャンスを知らないまま通り過ぎている。なぜかという、大きなチャンスは、大きなピンチの姿でやってくるから。ピンチをやり過ごしているからチャンスを掴むことが出来ない。

ピンチを受け止めてチャンスに変えた時、大きな成功がまっている。失敗を恐れずいろいろチャレンジすることが大事。やってみなければわからない。沢山の経験の中から地域にとってよい方法が見つかる。観光を成功させるのはそういうことだと思う。

・観光協会を作るならば、事務局長に観光業で実績のある有能な人を呼ばないと成功しない。マスコミを上手く使い、旅行代理店にも顔の効く本当の人脈をもっていて、営業ができる人物が必要。ホテル建設なども同じだが、まず有能な人物を迎えて相談しながら枠組みを作り始めないと、本来の目的であるお客様の快適性に繋がる適切な作りにならない。

ホテルなどは土建屋が建て易い形のホテルにされてしまう。組織も同じだと考える。まず観光の出来る有能な人物を決めて、相談しながら組織作りを行っていくとよい。



写真 37：講演会の様子・坂田氏



写真 38：講演会の様子・室瀬氏

## (2) 意見交換会・懇親会

地域住民が講師に観光について自由な形で質問し、話題を広げられるよう懇親会形式で意見交換を行なった。屋古地区の地域住民の観光の受け入れに対する意見について後日、屋古区民のみの場所で、聞き取りを行うこととした。



写真 39：意見交換会・懇親会の様子 1



写真 40：意見交換会・懇親会の様子 2



写真 41：意見交換会・懇親会の様子 3



写真 42：意見交換会・懇親会の様子 4



写真 43：意見交換会・懇親会の様子 5



写真 44：意見交換会・懇親会の様子 6

### (3) 屋古集落の意見

ワークショップを終えて、今後、屋古地域での観光の受け入れと地域活性化についての聞き取りを行なった。

■開催日時：平成 25 年 2 月 10 日（月） 19：30～20：30

■開催場所：屋古集落

■参加者：①対象者：屋古地区住民 8 名

②聞き取り役：増田耕平・宮城良治（事務局）

#### ツアーのマナーについて

・来訪者は常識的に振舞ってくれればよいと思う。集落内にはパパイヤなど人のものや、拝所など地域で大切にしている物もある。それらが無くなったり壊れたりしなければよい。

集落でのマナーだが、まずウガンジュや地域で暮らす人々に敬意を持つように言ってから集落に入れてほしい。

#### 受け入れ人数について

・一度に 100 人などの大人数はこまる。20 名位ならばよいと思う。生活に影響のない人数であれば問題ない。

#### ツアーコースについて

・ルートについてはアサギ～裏道～各ウガンジュを見てもらうのがよいと思う。屋古のよい風景を見れると思う。ハブに気をつけて。

#### 観光に期待すること

・観光を通じて、屋古を良い場所にしてほしい。集落の問題を解消して地域を救うというコンセプトで進めてほしい。

・地域のいいものを売るような仕組みをつくってほしい。

・自分たち集落で暮らす人々は例えるなら「木」だと思う。地域に根を下ろし、小さい頃からお互いの顔をよく知っている人たちと、どこにも行かず同じ場所で 70 年 80 年と歳を重ね、倒れる時もこの集落で倒れる。若い人はヤマシシと一緒に美味しいものを探してあっちこっちに行く。それはそれでいいと思う。しかし何か屋古を魅力と想ってくる人の中の何人かでも屋古の集落に根を下ろして、「木」になってほしい。

そして年を重ね、屋古の伝統を引き継ぐ大木に育ってほしい。そんな大木が 2、3 本あればそこから種が飛んで、木が増えて行くと思う。村を支える大木になってほしい。

---

## 意見全記録

・会話をしてお互いを知ることが大切だと思う。来訪者は常識的に振舞ってくればよいと思う。集落内にはパパイヤなどの人のものや、拝所など地域で大切にしている物もある。それらが無くなったり壊れたりしなければよい。

・集落内にはハブがいるから気をつけて歩いてほしい。ルートは屋古の魅力が伝わるのが大切なのでアサギを通る道がよいと思う。そして来た人がお金を払ってくれるような仕組みを作れたと思う。まずはやってみないとわからない

・常識的にふるまってくれたら何の問題もない。他所に来たら興味があっているいろいろ見たいと思うはず。取るなら写真という形がいいと思う。

・屋古は昔の情緒がのこる素晴らしい場所。昔の集落の道は舗装されてなくて垣根には全てフクギの木が生えていた。フクギの繁る場所で暮らしていたから、屋古の人は色が白いと言われたくらい。ルートについてはアサギ～裏道～各ウガンジュを見てもらうのがよいと思う。屋古のよい風景を見れると思う。

・一度に100人などの大人数はこまる。20名位ならばよいと思う。生活に影響のない人数であれば問題ない。

・集落でのマナーだが、まずウガンジュや地域で暮らす人々に敬意を持つように言ってから集落に入れてほしい。

・人が来てシークワサーが売れたら嬉しい。

・交流して、屋古を好きになり、住む人が出てきたらよいと思う。

・地域のいいものを売るような仕組みをつくりたい、タケノコや柑橘類、お土産品なども作って売店で売ったらよいかも。

・外の人が魅力を感じる生き物がたくさん棲む良い環境づくりをすすめて行きたい。その為の環境の目標づくりをしたらどうだろうか。お互に話し合いながら段畑の環境を守っていけるようことをしたい。農薬をあまり使わず自然を残しながら出来るように。

定年になってから小遣い稼ぎをしながらのびのびと余裕をもって、自然と共生できる農業の在り方がよいと思う。

・観光を通じて、屋古を良い場所にしてほしい。集落の問題を解消して地域を救うというコンセプトですすめてほしい。

・屋古の課題として、このままだと限界集落となってしまう。団地がなくなり、60代を中心とする住民が年を取れば、人がいない集落になってしまう。そうなるからでは何も出来ない。行動を起こすならば今だと思う。

・希望としては、若い人に移住して欲しい。しかしそうも言ってもらえないからリタイアした人々でもいい。いろんな人来てもらいたい。でも地域のことをしないで口だけ出すクレーマーは要らない。屋古への入居にあたっては、決まりを作り区長と面接して、三ヶ月くらい試行期間を設けて入居するような仕組みを作りたい。今後土地の売り買いや人の出入りに何か整備が必要と感じる。

・観光は地域の合意のもとに進めたい。集落全体に利益還元できる活動なら良いと思う。

・自分たち集落で暮らす人々は例えるなら「木」だと思う。地域に根を下ろし、小さい頃からお互いの顔をよく知っている人たちと、どこにも行かず同じ場所で70年80年と歳を重ね、倒れる時もこの集落で倒れる。若い人はヤマシシと一緒に美味しいものを探してあっちこっちに行く。それはそれでいいと思う。しかし何か屋古を魅力と思ってくる人の中の何人かでも屋古の集落に根を下ろして、「木」になってほしい。

そして年を重ね、屋古の伝統を引き継ぐ大木に育ってほしい。そんな大木が2、3本あればそこから種が飛んで、木が増えて行くと思う。村を支える大木になってほしい。

以上



写真 45：屋古集落での聞き取りの様子

## 第4章

### 黄金人検討委員会記録



# 平成 25 年度大宜味村エコツーリズム人材育成計画策定業務 第1回黄金人検討委員会 議事録

## <会議次第>

- ・開催日時 : 平成 25 年 10 月 21 日 (月) 午後 5 時半～7 時
- ・会 場 : 大宜味村役場第 1 会議室 (役場 2 階)

### ●議 事

出席：黄金人検討委員 5 名中 5 名

(宮城邦治、新城和治、山城春江、稲福智裕、山川均)

大宜味村 (山城均・藤田元也)

- ・配付資料：資料 1 : 設置要領            資料 2 : 委員会名簿  
                 資料 3 : 事業概要 (案)   資料 4 : 基本計画検討案

1. 委嘱状交付
2. 主催者挨拶・・・・・・・・・・大宜味村村長 島袋義久
3. 委員会設置について
  - (1) 委員会設置要領の確認
  - (2) 座長・副座長の選任・・・座長：宮城 邦治・副座長：新城 和治
4. 座長挨拶・・・・・・・・・・宮城 邦治
5. 協議事項
  - (1) 事業概要 (案) について
  - (2) 基本計画検討 (案) について

---

### (1) 今年度の事業について

- ・検討委員会を 3 回開催し、エコツーリズム人材育成基本計画を策定する。 (事務局)
- ・昨年度の基本方針で示されたように、大宜味村には様々な自然・文化資源がある。今年度は、これらを活用する人材をどうやって育成するのか。その一つのモデルとして、屋古集落でテスト的に育成を行ってみてどのような人材育成のプログラムが可能か。その様な内容のエコツーリズム人材育成基本計画づくりだと考える。(宮城邦治)

## **(2) 大宜味村のエコツーリズムとは**

・国頭村や東村と違う差別化していくようなエコツーリズムの在り方を考えていかなければならないと思う。

大宜味村はエコツーリズムをする時に、どのようなアプローチで地域資源を活用するのか。そのような整理を行うとはつきしてくると考える。(宮城邦治)

## **(3) 将来像について**

・実働的な人材の具体的なイメージを示す必要があると思う。また、計画からは、実働的な人材の育成と、将来的に育成される地域の人々の二通りの内容が示されている。まず整理する為に、実働的な人材育成の将来像、計画が必要だと感じる。(新城和治)

・エコツーリズム人材育成で育成される人材と、地域の人々がどのように関わるのかを整理したらよいと思う。(宮城邦治)

## **(4) 拠点について**

・検討案に示されている拠点エリアだが、ガイド育成の為にトレーニングのエリアと考える。エコツーリズムの拠点とするならば、屋古だけなのかという意見もあると思うので表現方法を工夫されるとよいと思う。(宮城邦治)

・実働的な人材の育成を行う為に、屋古をエコツーリズム教材とする事を、計画の中ではっきり示さなければならない。(新城和治)

## **(5) 検討案の整理**

・昨年度策定された基本方針と人材育成計画をすり合わせて整合性をもたせると、村としての方向性が見えると思う。そして具体的にどのような人材育成のプログラムを作っていくかという事を表わせればよい。(宮城邦治)

## **(6) プログラム作りに向けての提案**

・屋古でエコツーリズムのトレーニングをするにあたって、集落の近くで行う事から地域住民の迷惑にならないよう注意が必要だと思う。(稲福智裕)

・屋古のプログラム開発を地域の人々で行えばよいと思う。地域で暮らす人でなければ知らない事がある。地域の協力でさらに良いプログラムを作る事が出来ると思う。(山川均)

# 平成 25 年度大宜味村エコツーリズム人材育成基本計画 第2回黄金人検討委員会 議事録

## <会議次第>

- ・開催日時 : 平成 25 年 11 月 25 日 (月) 午後 5 時半～7 時
- ・会 場 : 大宜味村役場第 2 会議室 (旧法務局)

### ●議 事

出席：黄金人検討委員 5 名中 5 名

(宮城邦治、新城和治、山城春江、稲福智裕、山川均)

大宜味村 (山城均・藤田元也)

- ・配付資料：資料 1 : 第 1 回検討委員会議事録  
資料 2 : 基本計画検討案

1. 座長挨拶・・・・・・・・・・・・宮城 邦治
2. 協議事項
  - (1) 基本計画検討案について

---

### (1) 今年度の事業について

- ・モデルとなるガイドプログラムと今後の実施計画を示していくことが必要となる  
(宮城邦治)

### (2) プログラムづくりの方向性

・将来的な目標として多種多様なニーズに対応できるプログラム作成の想定はするが、まずは普遍的なプログラム内容で構成し、その後、実際の経験を通して対象の需要に合わせてガイド自身が知識や経験を深めてゆく段階が必要になると思う。(宮城邦治)

### (3) 将来像について

・地域の歴史や暮らし、自然を楽しく紹介できる知識と人間的素養を持ち、同時にエコツーリズムを通して地域の問題を解消して地域活性化を行うことが出来る、地域の誇りとなる人材であるべきだと考える。(宮城邦治)

#### (4) 構成について

・全体の構成についてだが、報告書にする事を考え、整理していったらよいと思う。調査や視察で得られたエッセンスを記載する事を考えると、得られた成果を基本計画にまとめ、実際の調査内容、視察地情報などは資料として付け加えた方よいと思う。(新城和治)

#### (5) ボランティアについて

・ボランティアの活用とあるが、地域の人々と協力しあいながら、人材育成を進めていくという意味では「地域住民の活用」という言葉の方がよいのではないか。表現について検討してほしい。(宮城邦治)

#### (6) プログラム作りに向けての提案

・人材育成を進める中で屋古の事を理解していかなければならない。まず屋古のプログラムを作成するなかで、区長や代議員、神人や地域の人々に屋古の歴史や自然などを聞きながら、プログラム構築をすすめていく。それが黄金人(ガイド兼コーディネーター)にとっての学びの場になっていく。そして地域の人々と黄金人(ガイド兼コーディネーター)が普段からコネクションを構築しながらルールも含めたツアープログラム作りを行い、実際にツアーに訪れた人が屋古集落で楽しむ事で、屋古集落住民が改めて集落の価値に気付く事ができると考える。

そして村民は大宜味エコツーリズムのサポーターであるという関係を作り出していく必要がある。(宮城邦治)

・今後集落でエコツーリズムをすすめるならば、区長や代議員会、神人などの地区の行政組織の理解が必要になってくると考える。そして、地域の人々に、地域の文化や自然の素晴らしさを広めていく方法の検討も大切な課題であると思う。(山川均・山城春江)

・景色のすばらしい山や滝であれば、フィールドの力を借りる事で、ガイドは安全管理の知識ぐらいあれば観光を行う事が出来る。そのようなスポーツ的なガイド方法もあるが、やはり植物や動物の知識をきちんと伝えて喜んでもらう事が必要であると思う(宮城邦治)

# 平成 25 年度大宜味村エコツーリズム人材育成計画 第3回黄金人検討委員会 議事録

## <会議次第>

- ・開催日時 : 平成 26 年 2 月 17 日 (月) 午後 5 時半～7 時
- ・会 場 : 大宜味村役場第 2 会議室 (旧法務局)

### ●議 事

出席：黄金人検討委員 5 名中 5 名

(宮城邦治、新城和治、山城春江、稲福智裕、山川均)

大宜味村 (山城均・藤田元也)

- ・配付資料：資料 1 : 基本計画 (案)
- 資料 2 : ワークショップ報告書

1. 座長挨拶・・・・・・・・・・宮城 邦治
2. 協議事項
  - (1) 基本計画 (案) について
3. その他

---

### (1) 基本計画について

考え方としては、実働的なガイドを目指す人材である黄金人 (ガイド兼コーディネーター) が活動を行う地域 (拠点) を定め、拠点の人々と話し合いを重ねながら、エコツアーの実践を通じて地域の実情にあった具体的なプログラム、ガイドライン、環境づくりを計画実行していく。そして活動を通じて蓄積されたノウハウを基に、ガイドマニュアルなどを作成し、より実践的な大宜味エコツーリズムの推進体制を構築していく。

ガイドを行う際には地域の自然や文化を中心に魅力あるエコツーリズムを行っていく必要があり、それを実現するプログラム作りをする必要がある。

黄金人 (ガイド兼コーディネーター) が呼びかけを行って、この事業に興味のある人、または人材育成に参加したい人を募りながらエコツーリズムを展開していく。

今後、他の 17 字の地域でエコツーリズムを展開していく場合も同様に、この考え方を基に各地域の特色ある文化や自然資源を活用し、拠点となる地域の活性化を成し遂げるエコツーリズムを行っていく。(宮城邦治)

## (2) 推進体制について

組織体制としては、村長から始まり担当課があり、その中に黄金人委員会があるというような体制と、黄金人委員会の役割、委員の構成条件などを含めて明記すべきである。そのようなしっかりとした推進体制によって本計画は進められて行くべきだと考える。

(宮城邦治・新城和治)

## (3) 環境教育について

喜如嘉小学校の野鳥教育でもそうだが、環境教育に取り組んでいると村内外から注目され、様々な人が来る。大変喜ばしい事だが、だからこそ、今後の大宜味村の環境教育の在り方が問われていると思う。計画の中にある「村民への地域資源の保全・利活用の啓発」において、今後、黄金人（ガイド兼コーディネーター）が中心になって行う大宜味村の環境教育の方向性と、学校との関係について明記する必要があると思う。(山城春江)

## (4) リスクマネジメントについて

自然の中で行うツアーにはリスクマネジメントは重要な問題である。地域で行うエコツアーはボランティアが中心になるためこの部分がなおざりにされる傾向がある。リスクマネジメントを大宜味村エコツーリズムの重要な検討課題として、今後しっかりと作り込む必要がある。(宮城邦治)

## (5) 用語の整理について

用語の整理を行って欲しい。例として「適正な環境保全」とあるが、保全とは「環境の適正な保護と利用」ということである。このような事を今後整理するとよい。(新城和治)

## (6) 報告書作成にむけて

推進体制と環境教育、リスクマネジメント、構成や用語、文章を整理して、報告書としてまとめて欲しい。(宮城邦治)